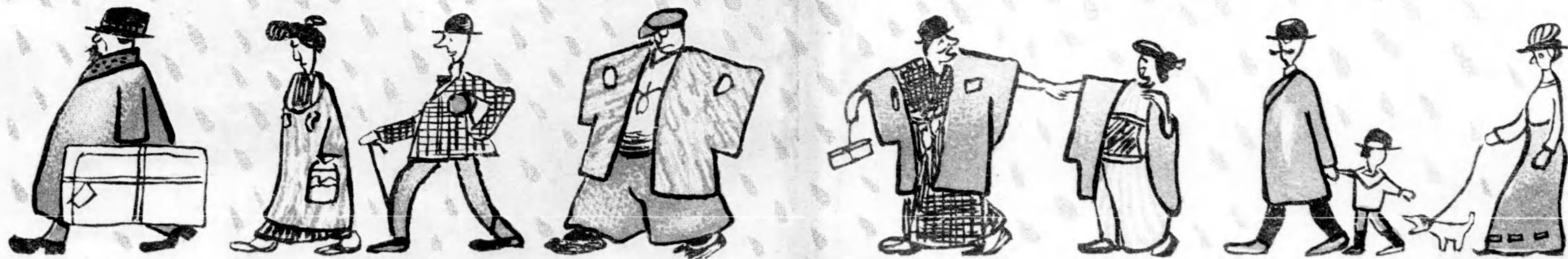
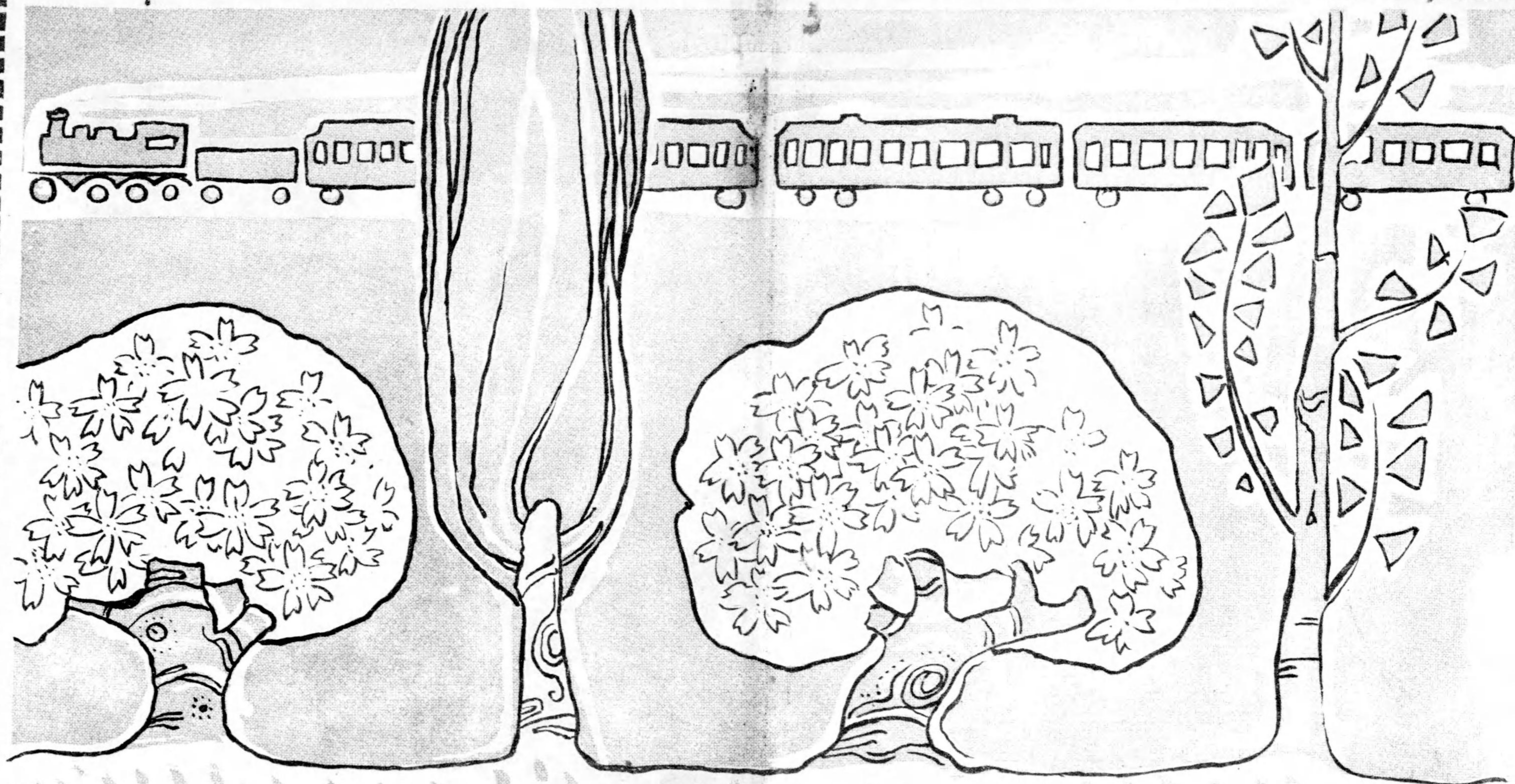




0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60

始





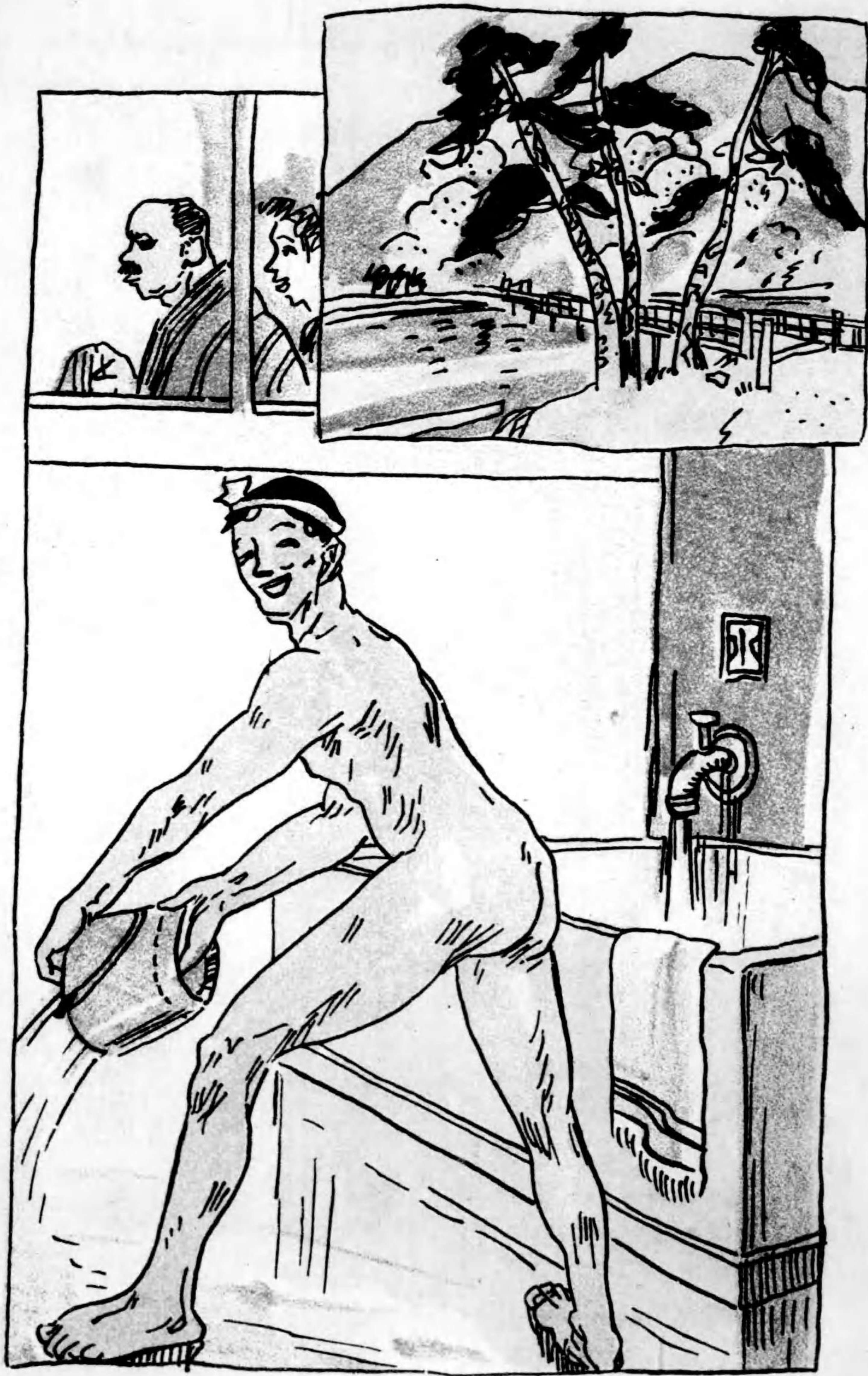
47103
748

いづら日記



大正
2. 10. 27
四交

深尾霞訂著



悪戯旅日記目次

- 一、雨の音聴く温泉宿……………(一)
- 二、飛んだ馬鹿を見る……………(二四)
- 三、長襦袢から旅藝人……………(五一)

四、質浪花節の大迷惑……………(七三)

五、櫻の零るゝ保津川……………(一〇〇)

六、悪戯のお蔭で仇討……………(一一九)

七、災難多き嵐山の宿……………(一四四)

八、汽車の中の大喜劇……………(一六三)

九、たはいもない和睦……………(一八三)

一〇、馬鹿らしき拾六圓……………(二〇四)

一一、更けた木屋町の夜……………(二二七)

一二、質のドクトル先生……………(二四三)



悪戯旅日記

深尾 葭汀 著

一 雨の音聴く温泉宿

私は、いたづらをして、到る所の世間様に御迷惑をかけ、思ふ存分嫌はれて見やうと言ふ目的で、友の大山三作を旅行の道伴れにしたのではなかつた。

(1) ながら、唯愉快にはいもなく、無邪氣に滑稽に、面白可笑く打興しながら、脚の導くがまゝに、たとへ十日間でも、辛い浮世の苦

〔2〕

勞を忘れた、謂はゞお茶番旅行がして見たいと言ふ、閑氣至極な馬鹿々々しい希望から、誰か好い道伴れがないものかど、いろ／＼友や知己の間を探して見たが、生憎私の友や知己の間には大山三作を除いては、これと言つて、お誂へむきな、好適しい道伴れの候補者が見つからなかつたので、兎に角悪太郎の喜ぶやうな、いたづらに對して、特殊の興味を有つてゐる、奇妙な男だとは知りながら、私は渠に白羽の箭を立たたのであつた。何故私が、念入りに探せば、他に友もあつたらうに、殊更ら選好んで、おもの堅い彼の世間様方に對して、まことに申譯けのいたしやうも無い、其麼いたづら好きな、大山三作を旅行の道伴れに誘うたかと言ふに、一は渠の天性剽輕な、そして奇智

と頓智に富める質を心から愛したのと、一は渠の爲めに、忘れることの出来ない、思はぬ面白い旅行をしたとの、古い記憶の幾ペーシか、私の胸底に深く藏せられてゐたからであつた。で、私は、先づ話の順序として、些しく今ま此所で、其の懐しい古い記憶の幾ペーシかを繰り擴げて、秘ツと蟲干をして見るとにする。――

〔3〕

それは三四年前の、春尙ほ浅い三月の中旬頃であつた。ふとした其の場の機會と興味に、ゝられて、私と大山三作はまだ梢に雪のやうな白い梅の花が、忘られたやうに三片四片殘

〔1〕

つてある、うすら寒い有馬の湯治客と洒落込んで、餘りに懷中も暖かでないのに、「兵衛」の川の別荘の、二階の大廣間に陣取つて、顯でも言ふ、素破しいお大盡風を吹しながら、水晶山から六甲山の濃い緑の色を烟らせて、咽ぶがやうに降りしきる春雨の、軒端の点滴の音を聴きながら、朝から温泉宿に雨とはおあつらへむきだなど、興じつ、二日酔の重苦しい、乾いた咽喉に熱爛の生一本を注ぎ込んで、たはいもない、後や前の分明ぬ馬鹿話しに耽つてゐると、突然、

「オヤ別嬪が……。」と、紅く染つた羞明さうな醉眼を瞬叩かせながら、もの珍らしさうに玻璃障子の外を指示した三作は、つと起上つたかと思ふ間に、慌しく障子を開けて、牽きつけら

れるやうに、拭き込んだ縁側へ出た。

「え、何だい、如何したんだ？」

不意に對座をしてゐた三作が、起上つたので、何事が湧いたのか、それとも泥濘へ別嬪が、仰向けに這つて、も轉げたのかと思つて、我知らず後に續いた。

見ると三四人の藝妓が、だらしない平常着をしたまゝ、直ぐ前面の橋際の、「高等温泉」と言ふ、白文字の横額の掲つてある下の、小さな噴水池の側から、手にく湯道具を携げて、藍蛇の目の傘を開けながら、何か聲高に噪ぎつゝ、橋にかゝつて來るばかりで、これと言つて、別に變つたともないから、何だくだらない、こんな田舎藝妓が、何が珍らしい、と思つた私は、

〔2〕

〔6〕

馬鹿にされたやうに考へて、直ぐ前の座へ戻らうとしたが、しかし、雨の中にキワ立つて白く見える脛に、赤い蹴出しを絡ませて行く、それらの女の、湯上り姿は、柔かな浮世繪草紙に見惚れてゐる時のやうに、酔うた私の瞳孔、と言ふよりは、胸に心地よく映つたので、其のまゝ、不格好な襦袢の袖から、両手を出して、三作の佇立んでゐる側の欄干に靠れた。

傘さした藝妓達は、私達が眺めてゐるのも知らずにか、まだお互ひに何か聲高に噪ぎつゝ、近づいて来る。

それを、同じ縞柄の襦袢を纏うた三作は、裾から三寸ばかり毛脛を露して、ふどころ手したまゝ、魅せられたやうに瞞めてゐたが、其の中の中年増の一人が、偶と首を傾げて、薄化粧し

た白い顔をチラと見せた刹那、

『よッ！』と、三作は、最と馴々しく叫んだ。

『あら！』

中年増は、頓狂な聲で應えて、佇留ると、伴れの藝妓は、期せずして、此方を見る。

『よ、御機嫌さん！』

中年増が、ハソ〜と小走りになつて、近づいて来るのを機會に、またも三作は、親し氣な調子で聲かけた。

『え、御機嫌さん。』

〔7〕

と、雨の顔へかゝるのも忘れて、上を見た中年増は、近寄れるだけ、近寄つて来て、

〔8〕

『いつ來どッてだしたンゆ？——お珍らしい。』
今更ら驚いたやうな表情をして、面長な顔に軽い愛嬌を漾はした。

『え、いつツて、昨日からさ。』

『まあ、私、些つとも知りまへんだした。』

『さうだらう。——伴れがあつたもんだから、招聘しやしなかつたから……。』

三作は、頸を伸したまふ、意味あり氣に言つた。

『さうだツか。——』

中年増の視線は、私に注がれた。

『ウムぢや、また後から招聘さうよ。』

『ほんまに？』

『ほんとだとも、屹度招聘して上げる。』

『ぢや屹度、たのみませ。』

『ウム合點や。』

三作の首肯くを見て、安心したやうに、傘をさし直し、軽く私達に會釋して、此方の橋際に待つてゐる傘の方へ、中年増は歸つて行つた。

そして何か二言三言囁語いたかと思ふと、また振願つて、

『屹度だッせ！』

と、黄ろい肝張つた聲で言つた。

『合點々々。』

〔9〕

『何うぞ、——さいなら。』

中年増がお叩頭をするにつれて、待つてゐた残りの藝妓も、
齊しく會釋した。

咽びつくやうに降る雨の川沿の路を縫れた藍蛇の目傘は、だ
らしない後姿を残して、歸つて行く。

私は、温泉宿と、雨中の女と言ふとを胸に描き、江戸時代の
のんびりした氣分を包んだ人情本に酔うてゐるやうな心地で、
先刻程よりの會話を聽いてゐたが、それにしても、——此宿へ
着いた昨日の夕景、貸下駄を穿いて、一緒に温泉へ行つた時、
薄氣味悪さうな面色をして、僕は有馬へ始めて來たんだが、し
かし、可厭な色だねえ、と赤く泥のやうな色に濁つた温泉に驚

異の眼を落して囁語いた渠が、如何して彼塵女に面識があるの
だらうか、と尠からず奇異に思ひながら、暫時雨に惱んだ藍蛇
の目傘の縫れて行く後を見送つてゐた。

『可怪しいねえ。』

前の座に戻つた私は、三作の顔を窺きながら、我知らず呟い
た。

『何が?.....』

『何ッて、今の女さ。』

『ウムあれか。』

『あれッて、君の有馬は初めてぢやないか。』

『さうさ。』

(14)

「好し、するとなれや免してつかはさう。——が、しかし、如何言ふ理由なんだ？」

「理由？——理由なんかあるものか、皆あれや嘘、嘘なんだよ。」

「何ッ？」

「否えさ、それが嘘なんだよ。」

「この野郎！ いや〜我輩を馬鹿にするんだな、好し！」

「またも私は、火箸を握る真似をした。」

「まあ待ち給へ、嘘だから、嘘だと言つてるに、君あ、おそろしい風通しの悪い男だねえ。」

「まだ其麼とを言つてやがる。——もう承知が出来無え。」

「——違うよ、僕の嘘と言ふのは、真個、頭から彼の藝妓とお馴染で無えと言ふんだよ。」

「——。」

「唯彼奴が、此方に向いたから、擲揄うつもりで、よッ！ と聲かけたら、彼女如何考違ひしたものが、彼麼なれ〜しい口を利いたのさ。真個、思はぬ掠鳥さ、ハ、ハハ、ハ。」

(15)

私は、狐に騙まれたやうに、馬鹿々々しく考へた。と、同時に、兩人が話し合つてゐた時の態度、三作と言ひ、中年増の親し氣な口吻と言ひ、考へれば考へるほど、此奴まだ私を瞞着してやがるぞ、と言ふ感じが胸に湧いて、ニタ〜平氣さうな微笑を、酒に染つた晴れやかな頬に漲らせてゐる三作を、凝乎と

(16)

睨めつけるやうに見た。

「疑ひ深い、可怪しな男だねえ。……真個、彼女あ人違ひしてるんだよ。」

私の視線が合った刹那、急に三作は、真面になつて。また斯う言つた。

「ちや屹度、それに相違ないんだね。」
「勿論！」

けれど真面目に、明確に、三作が應えるほど、私の胸の判断の明るい光りは、黒い疑問の雲に蔽はれて来る。……

「若し違つたら、……馴染だつたら、如何する？」
「え、何、彼奴に僕が馴染だつたらか、……ウム、すれば何でも

與る。お入用とならば、お粗末ながら、即座にこの首を進呈する。」

「何ッ、首？ 冗談ぢやない、其座安物の首を貰つたツて、却つて迷惑さ。」

「ちや、何を献上仕らう？」

「さうさねえ。君みたいな貧乏人を逆さまに振つたつて、赤い血すら出るためしが無えから、……と、さうだ！ 彼女を此座へ兎に角招ぶとにして、若し僕の見込み通りだつたら、花代の全部から、總ての入費を君の負擔と決定するにしよう！」

「ウムそれや面白い、痛快だ！」

(17)

行きがかりから、また三作が、虚勢を張つてゐやがるとしか

考へなかつた私は、真から花代を負擔して呉れる心地になつて「好し、屹度負擔するんだねえ。——途中で、兜を脱いだつて、免さんぞ！ さあ、金打の變りに、これを吹け！」

と、右の拇指と示指の指端を合はして圓くし、丁度小兒が遊び事の約束を堅めるやうな態度で、三作の口の傍へつきつけた。

「あい、伯父ちゃん、幾つでも、坊は吹くよ。」

「もうそれで可い、もう澤山だ。」

私は、手をひいて、前の通り橄欖色した天鷲絨の脇息の上に肱を凭せた。

「ぢや、若ち伯父ちゃんが、坊に負けたら、如何つるんだい？」
「ウム僕が負けたらか。無論、花代だけは我輩が負擔するさ。」

と、言ふと、急に三作は、戯れた口吻を棄て、
「それや不可ない、卑怯だよ。——第一、僕が事實を吐露してゐるにもかゝはらず、君あ否定するばかりか、紳士に對して、禮を欲くやうな、まことに不穩當な言辭を弄してゐるんだから、其の罪、其の罰として、一切の入費を負擔し、且つこの行の解散するまで、我輩に對する絶対の服従を、其の附帶條件とする」と、豫じめ承諾し給へ。」

「——。」

「が、しかしだね。君のやうな、疑ひ深い低能兒は、破約する位のとは、朝飯前のお茶漬けだらうから、若し負擔と絶対の服従の一つでも、履行を飲した場合は、君の其のシヨボ髯

を剃り落すか、それとも撈り取るから、さう思ひ給へ。』

私は、盗人猛々しいとは、此奴のとだ、と思ひながら、私が友や知己の誰彼れから、其塵見ツともない、シヨボ髯を生して置くな、眞個貧相な易者のやうだから、早く剃り落とし給へ、と度びく言はれながらも、一種の淡い馬鹿々々しい反抗心から如何しても剃り落さない、私にすれば、寧ろ痛快として、鼻の下に最と大切に蓄えてある、この貴重な髯を取らうとは、飛んだ威嚇のお茶番を言やがるわい、如何して其塵威嚇の手に乗るものかと考へて、

『ウム斯うなる上からは、如何でも構はない！——ちや一刻も早く招ぶとにしやう。』

と、今に見て居れ、一泡吹して呉れるぞと心に叫びながら言つた。

『では、右の條件を一々御承諾になりましたのでげすな？』

『勿論、大御承諾さ。』

胸を叩く見得をして私は、慌しく手を鳴らした。

襖の外へ、頬紅な、係りの可愛らしい女中が来たので、先刻この下で、この男と話してゐた中年増の藝妓を招聘して来て呉れ、と口早に言ふと、怪訝さうに睨つて、暫時小首を傾けてゐた女中は、

『其の名前は？』と、微笑みながら訊き返す。

『さあ、それが分らないんだ。——この馬鹿が、強情を張つて

白状しないんだから。』

『まあ——。』

女中は、屹驚したやうに圓く眼を睜る。

『すこし堵事をしてゐるんだから、早く考へ出して招んで呉れ給へ。』

ッッ／＼忍び笑ひをしながら、誰だしたやろ、誰だすやろ、胸に心ほご手をあて、獨言つてゐた女中は、偶と思ひ出したやうに、

『あ、大徳の玉龍はんや。——今ま先刻其所の温泉から、二三人然らつて出やはった、廿四五の面長の、——貴方、玉龍はんだすやろ？』

と、三作の澄した顔を見て言ふ。

『知らないよ。』

『違ひますか？——そしたら、誰だすやろな。』

また女中は、考へかけた。

『ぢや可い、斯うしな。——慥かに今ま其所の温泉から出た藝妓は、三人しか外にゐなかつたのだから、其の大徳とか言ふ家へ行つて、今ま温泉から歸つた藝妓を皆來るやうに言つて呉れ給へ。』

私は、大東をさめこんで、斯う言つた。

二 飛んだ馬鹿を見る

程なく、衣擦れの音がして、金砂の撒いた模様のある襖が開いた。

「先刻ほどは、——お、きに……。」

見違へるほど、白く化粧した顔が、問題の中年増を先頭に、三つ現はれた。

「や、雨の降るのに、御苦勞でしたなあ。」

私は、殊更ら若い二人の方に對つて言つた。

「ホホ、、、旦那はんのとなら……。」

「ハ、ハハ、、、何所までもと言ふんかい。」

「まあ、其麼もんだすやろ。——あゝしんど。」

若い丸顔の方が、私の前の左側へ座を定めながら言ふと、團栗眼の若い方が、銚子を取り上げて、

「まあ、お一つ……。」と言ふ。

「ウムそいつあ、忝けない。」

斯う言つて私は、一口に呑み乾した。

「旦那はん、お酒杯を……。」

丸顔は、酒杯の請求をする。

「しかし、可厭な雨だんなあ。」

「真個可厭、何さ、いゝ雨さね。」

「叩きまッせ！」

妙に態をして、丸顔は一寸恐い顔をする。

私は、何氣ない調子で、一分の隙も油断も見せず、丁度公判廷の検事が、被告人の陳述より、論告の屈強な證左と材料を得んとするやうな、底鋭い眼光と聴耳を敬て、三作の態度と、中年増の此座へ入つて來た最初から、洩さず瞞めてゐる。

三作の側へ座つた中年増は、しげく懐し氣な視線を送りながら、

「まあお久しぶりで、一ついたゞきまッさ。」

と、半ば奪ふがやうに、三作の手から、酒杯を取り上げた。

「ウムさうだねえ。久しぶりで、お酌さしていたゞきまッさかね

え。」

團栗眼のが注がうとするのを遮つて、三作は、手近の銚子を手持つた。

「あお美味いと。——ほんとに、お珍らしいおますなあ。」

「真個ふしぎだねえ。——斯うしてお前が生きてゐるとは。」

「まあ。——よう其麼を言つとッてだんなあ。しかし、月村はんは、何ないしやはれましたか？」

「ウム月村か、——あれやペストで死んだよ。」

「え、ペスト？ 阿呆らしい、其麼とがおまッかいな！——

私、と、待つてお呉んははれや。あれが去年のお正月だしたよッて、そうく、一昨年の秋に出逢ひましたか……。」

「フーム、妙なものだねえ。」
 三作は、奈何にも、或不思議に堪えぬと言つたやうな面色をした。

「何が、其塵に妙だンのや？」

「否や何程言つたつて、僕の言ふとを信用しないから、言はな
 いがね。お前がさうして、一昨年おととしの秋に出逢つたと言へば、真
 個人間の約束ほど、儂いものは無いと思つてねえ。思ひ出す
 と、其の四五日前に来て、お前に出逢つたと言つてゐたのがあ
 つたがねえ。」

中年増の面色は動いた。

「え、ほんまだツかいな。」

「冗、冗談ぢやない、縁起でもない其塵嘘をつくものか。——奴
 も、可哀想に三日ほどの病ひだからなあ。」

「まあ、お可憐しい、——私、今が今まで、月村はんは、お壯健
 で、相變ず遊んどつてや、とばかり思つてましたが……。」

微かに中年増の眼に濕りが含まれた。
 私は、しきりに團栗眼や丸顔に酌されて、内心言ひ知れぬ関
 を擧げながら、ザマ見やがれ、やはり馴染も馴染も、深馴染ち
 やないか、と思つて、

「イヨ、君、御馳走さま！」

と皮肉つて囃し立てた。

「さあ、御慮遠なく、——もう斯なれば仕方が無いからねえ。」

[30]

嬉しうな色を湛えながら、三作は、酒杯を呉れた。

『これや我軍門に降つた、最初の償金かね？——好しく嘉してつかはすぞ。』

私は、心の底から、痛快に感じて、其の酒杯を受けると、中年増は、白い腕を伸して、

『旦那はん、ごめんやすや。』

と、向ふ側から、酌をする。

『あ、漏れるよ。』

グツと私は、呑み乾して、其の酒杯を中年増に呉れながら、前に居据つてゐた酒杯を三作に渡した。

『しかし姐さん、こんな流行遅れの面をした奴でも、古馴染と

[31]

鏡が無いんだから。』

告げる。

唯嬉しうに、ニタ／＼しながら、酒杯を嘗めてゐる三作に

に。』

いしとッてだンのや？——あんな憎らしいことを言つてはるの

に。』

『え、ほんまに……。』と、言ひかけて、中年増は『貴方何な

な心地で言つた。』

言ふものは、結構なものだねえ。何だかしめぼい話しが、直

ぐ湧くのだから。』

私は、この場合ひ皮肉ると言ふよりは、勝誇ると言つたやう

な心地で言つた。

『え、ほんまに……。』と、言ひかけて、中年増は『貴方何な

いしとッてだンのや？——あんな憎らしいことを言つてはるの

に。』

唯嬉しうに、ニタ／＼しながら、酒杯を嘗めてゐる三作に

に。』

『え、ほんまに……。』と、言ひかけて、中年増は『貴方何な

いしとッてだンのや？——あんな憎らしいことを言つてはるの

に。』

唯嬉しうに、ニタ／＼しながら、酒杯を嘗めてゐる三作に

に。』

『え、ほんまに……。』と、言ひかけて、中年増は『貴方何な

いしとッてだンのや？——あんな憎らしいことを言つてはるの

に。』

唯嬉しうに、ニタ／＼しながら、酒杯を嘗めてゐる三作に

に。』

『え、ほんまに……。』と、言ひかけて、中年増は『貴方何な

いしとッてだンのや？——あんな憎らしいことを言つてはるの

に。』

唯嬉しうに、ニタ／＼しながら、酒杯を嘗めてゐる三作に

に。』

ど、中年増に酌されながら、三作が應えると、一座はどツと笑つた。

『真個さうさ。——美しい神さまの世界には、鏡なんか不用だからねえ。』

負けずに私も言ひ返す、酒杯は絶えず一座を廻る。自然に私の耳は熱る。

戸外の雨の湿りを顔はして、丸顔と團栗眼が、どて、どてん、どてん、と白い象牙の撥で、しだいに忙しく、太い一から、細い三への音律を調べる。——

三味線の音の好きな私は、柔かい鳥の毛で、耳の底を擦られるやうに感じて、やはり酒杯を放さずに、いつも藝妓が、斯う

して三味線を斜めに持ち構へた時の、軽いさうした美しさど、花やかさの、——みだらな、躁ぎ切つた聲で、酌して廻る時に感じる、これが腐つた肉の所有者で、金さへ拂へば、公衆の女だと言ふ輕侮が私の眼から消へる、奇異な自分の氣分を考へながら、三作の方を見た。

『さうかねえ。もう足掛け四年にもなるぞあ早いものだなあ。』
奈何にも三作は感動したらしく言つてゐる。

『さうだんが。梅勇姐はんが、ほら、やはり貴方の御連中の、そ、田中はんの赤兒はんを生はつたのが、丁度、四年前の春だすよツて、私が、其の夏に彼所から、仕替を取つたんだすさかいなあ。』

(34)

「ウムさうく梅勇が、田中の胤をへり出したのが、さうだ四年前だ。」

と、指を繰つて、三作は首肯いた。

「さうだすやろが、あれから私、また都合が出来て、其の翌年の秋に、この有馬へ仕替たんだすが、いつも貴方のとやら、彼の時分の御連中のとを思ふてまんのやわ。」

「それはく。」

半ば茶化すやうに言つた。

「嘘やと思ふとツてだすの？」

「否や、決して其歴失禮な、嘘だなどゝは思ひませんよ。——また決して、事實だとも思はないけどもね。」

「まあ、ホ、ホ、ホ、しかし貴方、私が、この有馬にゐることを聽いてだしたの、浅田さんからだッしやろが？」

「—。」

「さうやわ、屹度さうやわ。昨年冬に、浅田はんが、有馬へ來とツての時、私が、貴方のとを訊いてゐたのを、聞きやはつたからやわ。——そやなけな私が、有馬にゐるとが分明へんし。」

「如何だす？ さうだすやろが……。」

呑込み顔した中年増は、噪いだ調子で言ふ。

「ウムまあ、さうとしやうかねえ。」

(35)

「阿呆らしい、しやうも何もおまツかいな。——やッぱり思ふてゐればこそ、訊きまんのや。如何だす？ それでも嘘やと言ひ

なほるか。

『ハイハイ。』

と、洒落るやうに言ひながら、
またも三作は、中年増と酒杯の交換をした。

私は、これだけ話題があるからには、推察より以上、餘程の古馴染だわい、と、いよく勝誇らざるを得なかつた。――が、しかし、彼女と三作の間には、如何言ふ關係、酒席以外に結ばれた絲の關係があるのだらうか、と我知らず深く思ふて、偶と翻つて考へると、私の胸の勝誇りを暗闇に導くやうな言が、中年増の口から洩れたやうに思はれた。

と、言ふのは、三作が、私の友や知己の名前を知り抜いてゐ

ると共に、まだ渠が、伯父の安藤と言ふ、醫者の家に寄食して毎日其の伯父から、お前のやうな怠惰者はない、と叱言を啖ひながら、可厭々々、破れた靴に、泥に塗れた脚絆を穿いて、中學へ通學するやうな顔しては、一日私の家で、境遇の不平、伯父の妻、渠にすれば、義理の伯母になる人の邪険苛酷の扱ひを零しながら、私の書棚から、新刊の雑誌や小説を提出しては、日あたりの可い縁側で寝そべつて、讀み耽つてゐた時分からの友人であつたから、私は、よく渠の友や知己の名を知つてゐる筈であるのに、今ま中年増との話題の中に上つて、月村とか、田中、淺田とか言ふ姓は、嘗て渠の口からも、また渠の友人からも、一度だつて聽かされたとの無い、私にすれば、其の人物

の存在さへ、疑がへば疑ふとの出来る、そんな男と、いつ交際し、いつ歡樂の酒杯を共にしたのか、と變に思へば思ふほど、私の勝誇りは、怪しみの薄闇に迷はされた。

が、ふしぎなほど調和される、兩人の會話の事實を思ふと、胸に擴がつた薄闇から、またも勝誇りの明るい灯の色は、チラチラ閃いて来る。

どて、どてん、どてん、と丸顔と團栗眼とが、調べてゐた音律は合はされて、荐りに、旦那はん、一つ聴かしとくなはれ、と甘へるやうに誘ふてゐたが、胸に勝敗の如何の蟠まつてある私は、自分の思ふほど酔の波に浮されてゐなかつたものか、お、いそれと歌が口へ出て來なかつたので、唯テ、隠しに箸取つて

見たり、酒杯を嘗めたりしてゐると、丸顔は、にッと私の顔を窺いて、心ほど下顎をつき出したかと思ふと、早や都々逸を唱つてゐた。

緩く胴の上で、白い撥が躍つて、丸顔が唱ひ終ると、肝高い聲で、またそれを受けて、團栗眼は違つた句の都々逸を歌ひ出す。

中年増は、晴やかな顔をして、私に酌をする。

斯うして、幾度びか、若い方の二人が、都々逸を繰り返すと中年増も、酒杯を置いて、可成り、湯の町の藝妓としては、さびのついた咽喉で、「假りの手枕夢ともならで、幾夜寢覺めのもの思ひ」と、妙に首を顫しながら歌ふ……

「さあ、西村はん、久々で一つ自慢の長唄を聴かしてお呉んなはれ。」

と、丸顔の三味線を取上げて、堅溝彫のした三の轉手を軽く心ほど緩めながら、中年増は、三作の顔を見た。

私は、可怪しく思つた。——西村？ 西村！ と心に叫びながら、何故大山を西村と呼ぶのであらう？ それに三作が、柄にもない、長唄を知つてゐるとは、殆んど十年も交際つてゐる私が、今ま彼女から聴くのが、初耳だ。これやいよく可怪しいぞ、と思つた其の時、斯うして、月村とか、田中、淺田とか言ふ、嘗て私にすら語つたとの無い友と共に遊び、この中年増等と馴染んだ、それすら話さない男だから、或は長唄を知つてゐ

るのかも知れない、と私は、興味と言ふより、寧ろ油斷のなるの案外な男だ、と言ふ心地で、三作の態度を凝乎と瞞めてゐた。

「さあ、——ほうい！——唱ひなあれンか、早やう西村はん！」

前奏をして、中年増は、ぢれつたいと言つた顔して促した。「ウムさうだなあ、久々だから唱つても可いが、しかし、今日は癡さう。」

「何故？」

「何故つて、何だか、唱ふ氣がしないもの。」

「ちや、何を唱ひなはる？」

「さうだねえ。何を唱はう？」

酔ひ切つてゐる三作は、故どらしい苦しうな表情をする。
『さうだすやろ、唱へまへんやろ。』

拗ねたやうに言つた中年増は、自棄に三味線を掻き鳴らす。

丸顔が、中年増の箱から出した三味線の音律を調した。しつ

くり合つた三挺の三味線は、肝高く、更らに四圍を顛はすやう

に、賑やかに浮き立たしめた。
『ラツパ節！ ラツパ節！』

三作は、壓えてゐた或ものが爆發したやうに叫んだ。

直ぐ調子は、ラツパ節にかはつた。けれど、三作は、口をモ

シ／＼させながら、直ぐ歌ひさうにもない。
肝張つた團栗眼が、自から浮れ立つたやうに歌ひ出した。次

ぎに座つた丸顔が唱つた。中年増も唱つた。

『お次ぎの番だよ、お次ぎの番だよッ！』

三味線と一緒に囃し立てられて、思ひ切つたやうに、三作は

歌ひ出した。
辛つと、——二度ばかり曲譜をへんでこに支えさして、絶句し

ながら、それも中年増に助けて貰つて三作は、歌ひ終つた。

『さあ、貴方の番だッせ！』

丸顔は促したが、私は、一種の虚勢から、——ラツパ節なんか

唱ふて喜ぶやうな、二本棒でない、と言はぬばかりに、酒を呑

んでゐた。
また團栗眼から、丸顔、中年増と次第に廻つて、三作の番に

移つた。

「ウム此奴の分も、俺が歌つてやる。」

關所を斬抜けて、下り阪にかゝつた人のやうな調子で、其の癖三味線の三筋を脱線してゐるのも忘れて、三作は、唱ひ出す。私の眼に、三人の藝妓の、私達に對する一種の輕侮の色が流れ込むのを感じた。

「西村はん、何で、そないに聲が落ちたのだす？」

中年増は、撥の手を留めて、ふしぎさうに見た。

「ウム、ラツパ節なんか、歌つたところが無いからねえ。」

「さうだすやる。そやなけな、其聲やなかつたと思ふてました。」

三味線の音が消えた。すると、三作は、「流笛一聲新橋を……」

其の最も得意とする、牙えた聲で、鐵道唱歌を唱ひ出した。

「早や我流車は離れたり」それに和して、丸顔が三味線を持つた。中年増も、團栗眼も持つて、奏き出した。

いよく三作は、真から浮れ出したやうに、晴やかな生々した顔をして、「愛宕の山に入り残る、月を旅路の友として、右は高輪泉岳寺……」と合唱をする。

「さあ、貴方も、この軍歌を唱ひなはれ。」

中年増の聲を聴いて、いよく私は、馬鹿にされたやうに思つた。——私も、茶屋酒の味を知つてから、可成りの月と年を重ねたが、鐵道唱歌を唱へと強いた藝妓にも、また其塵幼稚園の

[46]

子供のする遊びにも出會したとがなかつた。

鐵道唱歌は、到頭御殿場で停車した。

「ぢや姐さん、何か僕も唱はうよ。」

「軍歌だツか？」

中年増の顔が、憎々しかつた。

「否や、歌澤を……。」

「歌澤？——よろしいおまつ！」

直ぐ三味線を持つた中年増には、皮肉な色がほの見えた。

「秋の夜だせ！」

一寸音律を調べて、三の絲から直ぐ、中年増は、チントンシヤン、と奏き出した。

「秋イ——の一夜ウは——ア」と、拙いながらも、私の秘藏とし且つ十八番とするのを歌ひ出すと、いつになく、節付けから聲をつける拍子の間取りまでが、我ながら、心地好いほど巧く唱えた。

「ヨーヨー！ あざやか、あざやか！」

中年増も、丸顔も、團栗眼も一齊に讚した。酒杯は舞込む。私は、征服られた屈辱から遁れ、却つて敵の根據地を破つて凱旋の榮冠を得た時のやうな、自誇を感じた。

[47]

興に乗つた私は、暮の市に小商人が、丁度藏ざらへでもするやうな調子で、望まるゝまゝに、またも苦しい聲を絞つて、歌えるだけ歌つた。私が浮かれ出すにつれ、三作の顔は、次第に

曇つた。

『西村はん、さあ一つ聴かしなはれ。——長唄を……。』

『。』

『何だすのえ。——早やう歌ひなはれンか。』

もどかしさうに中年増が促すほど、三作は、歡樂の驛を過ぎ去つたやうな面色で、自棄に酒杯を持つ。

『ウム僕よりか、此奴に浪花節を語らす方が面白い。——オイ一つ、頃は元祿十四年てえのを聴かして呉れ！ え、君！』

と、酒杯と共に、三作は、私に持つて來た。
『あ可いわ、浪花節面白いわ。——是非願ひませ！』
それに和して、丸顔も言ふ。

私は、前後も忘れ、丸顔の浮々した眼に魅せられて、唯譯けもなく、——極めて野卑な聲調で、穢多か靴屋の職人か、それとも趣味の卑い所謂成金先生が喜んで唱ふものだと思ひながら、一時の好奇心から、蓄音機の音譜で、辛ふじて覺えた、「頃は元祿十四年、旬は彌生の中の頃、七重八重咲く九重の、花の都の空よりも、勅使東へ御下向……」と言ふ、義士傳の殿中の及傷の一節やら、大高源吾の笹賣りの一節やらを得々として語つた。私が語り終ると、更らに座は浮いて、三作もにこやかな色をする。が、其の反對に、中年増は、窺み見るやうな眼眸で、三作の顔を噴めては、考へ出すと言つた面容をしきりにした。偶とそれが眼に入ると、またも怪しみの薄闇が、私の胸の浮

(50)

かれきつた酔の波の上へ、甦るやりに擴がつた。

『オイ姐さん。何かい君あ、此の男と一体何所での馴染だつたのだい?』

突然私は、——我を忘れて斯う訊いた。

『えゝ。ホホ、ホホ、神戸でだすわ……。』

『何、神戸? ——神戸の何所で?』

『何所で、中檢にゐた時分だんが、——しかし、私、思ひ違ひしてやしまへんやろか。——考へると、慥か西村はんには、左の頬に大きな麿子があつたと思ひまんのや……。』

三作は、左の頬を撫で、プツと吹き出した。

三 長襦袢から旅藝人

翌朝、——馬鹿々々しく思ひながらも、仕方無く私は、約定を重んじて、花代から、一切の入費を支拂はうとしたが、如何したとか、入れて來た筈の紙幣が入つてなかつたので、兎に角三作の墓口を借用し、私の財布と合せて、お茶代やら、女中への纏頭を渡して了うと、もう兩人の間には、五十錢銀貨が一つと十錢が四つと、銅貨が四五枚しか残つてゐなかつた。

(51)

『つまらないを疑ふから、這麼破目に陥込むんだ。——馬鹿馬鹿しい、これちや俵 乗れないぢやないか。』と、こぼす三作を

宥めながら、だら／＼下りになった三里近い、雨あがりの泥濘つた道路を三田の停車場へと、裾をからげ、次第に重くなる足を引摺つて、辛つと辿り着いたのは、午過ぎであつた。

都會に馴れた私達は、直ぐにも流車に乗れるやうな心地で、停車場へ駆付けけるなり切符を二枚求めたが、大阪行きは、十分ほど前に發車したから、今度はもう二時間餘り待たねばならぬと聽いて、夥しい一種の力抜けを感じ、つまらないねえ、これだから田舎は可厭だなど、互ひに呟きながら、兎に角芝居の道具立てよろしくと言つたやうな、一二等待合室へ入つて、肉刺の幾つともなしに出來た痛い疲れた足を休ますことにした。そして眞から歩き草臥れた私は、精氣を吸い取られて了つた

人のやうに、茫乎した眼で、唯一二等待合室であると言ひたいが爲めに、謂はゞホンの裝飾的に備え付けてある、卓上の新聞雑誌の綴込みを繰ひろげては、讀むともなしに眺めてゐた。

「オイ君、這麼とをしてゐたつて、つまらないぢやないか。」

敷島を自棄に吹してゐた三作は、突然斯う言つた。

「何がさ？——だつて、仕様が無からうぢやないか。」

「否えさ、僕あ腹が空つて、それに寒くツて堪えられないから何所かへ行つて、晝飯を喰つて來やうと言ふんさ。」

「晝飯？ 冗談ぢやない！ そんな贅澤な眞似が如何して出来るものか。——お腹の北山時雨は、お互ひさまだよ。」

「ぢや、絶対に喰はさないんだね？」

『何喰はすも喰はさないも、第一、それだけ大藏省に正貨の準備が無いぢやないか。』

『え？ だつて、一圓ばかりあつたらうが……。』

『馬鹿！ 歩いて歸るのかい。——切符をお買ひ遊ばしたから、もう七銭きや残つてゐないよ。』

『何、七銭？ ——贅澤な二等なんか買うからだ。』

黙つたまゝ、私は、三作の前へ、赤い切符を二枚並べた。

『オヤさうかい、僕あ青を買つたからだとばかり思つてゐた。』

——だが、七銭ありや、急場凌ぎが出来るぢやないか。』

三作は、何所までも後へ負ぬと言つた面色をした。私は、腹が立つた。

『急場凌ぎか？ 冗談ぢやない。——天保錢の通用した時代と違ひますよ。』

『ハ、ハ、ハ、何かい、それぢや晝食は贅澤をして、御飯を喰べるに限ると言ふ規則でもあるのかい。——え、おい！ 飢えた者食を擇ばず、飢しい時には不味もの無しだせ！ 七銭ありや温かい餛飩が三杯喰へるよ。』

『——』

『そこで昨日の約束通り、吾輩に對して、君あ絶対に服従の義務を有つてゐる、謂はゞ憐れ憫然な奴隷だけど、吾輩にはお慈悲がある。——可哀想だから、其の中の一杯だけは喰はしてやる』
この場合私は、馬鹿らしいと言ふよりも、寧ろ可笑く思つて

呆氣に取られたやうに、三作の顔を眺めてゐた。

『何故黙つてゐる？ 吾輩のお慈悲を有難く思つて、さあ來給へ！』

躁ぎ切つた三作は、長椅子から起上がるなり、私の手を捉つて促した。

『蒼蠅い男だねえ。』

『何？ 蒼蠅い男だと……。』

殊更ら三作は、恐い顔をした。

『否え何、仕様が無いなあ、と申しますんで。』

『好し、ちや喰ひたくないんだね。』

『否えなかく、大いに喰ひたいんで。』

『それ見ろ！ 横着な！ 愚圖々々吐さず、さあ早く來い！』

『ハイハイ。』

荒鷺の爪に罹つた小雀のやうな調子で、到頭私は、疲れきつた重い腰を持上げた。

構内を出て、曇つた午後の日光を受けた、廣い泥濘つた道路の、所々に轍の深く刻まれた痕の水溜りを、踏占める毎に痛む肉刺の出來た足で、危くも避けながら、履減したひどい下駄を穿いてゐる私達は、着物に泥跳のあがるとを恐れて、やはり有馬から、三里近い道路を辿つて來た時のやうに裾をからげ、或洒落から兩人が昨年の冬に拵えた揃ひの、けばくしい紅の入つた、荒い模様の長襦袢の裾をチラつかせながら、路傍の人々

が、それを指示して笑つてゐるのも願見す、一丁ばかり行くど
 其の突當りに、屋根看板のあがつた、小さな運送店の軒並に隣
 つて、表口の玻璃障子の上に、「うごんそば酒肴いろく」と筆
 太に記して、低い軒の街燈には、「御料理 XX亭」と書いた汽
 車の待合とも、煮賣屋ともつかぬ怪しげな家があつた。
 其の家の表口まで行つた三作は、私を願見て、つと障子を開
 けた。私も、つゞいて入ると、そこは一面土間になつてゐた。
 薄汚れになつた白い布のかゝつた、圓形の卓子が、かなり配
 置よく三脚ばかり並んである上には、麥酒や正宗や、古びたサ
 イタなどの壺が、ごつちやに七八本肩を並べ、其の横の小さな
 籠には、熟れきつた蜜柑が盛つてある。

『さあ掛け給へ。』と、手近の卓子の前に陣取つた三作は、側の
 椅子を取つて俯めた。
 私は、軽く首肯いて、腰を下しながら、向ひ側の卓子に、銀
 杏返しの根のガツリと下ちた、神経質らしい顔を安白粉で浮立
 たせた二十四五の、見るからも Obscene な表情に富んだ酌婦体の
 女を相手に、何か秘々と戯合ひながら酒を呑んでゐる、日に焼
 けた黒い頸へ、これ見よがしに薄い白絹の首巻をした、光つた
 黄ろい米澤の羽織を嬉しさうに着込んだ、此の邊りの土臭い、
 それでも其の當人は、一廉氣執つてゐると言ひたいやうな青年
 の、鍍金の眼鏡をかじた、面炮だらけの横顔を、言ひ知れぬ興
 味、——見縊つた果て、馬鹿にしたやうな心地で眺めた。

「おいでやす。」

ど、其の面砲のお相手をしてゐた女は、私が椅子へ身を落着ける反對に、椅子から身を起して迎へやうとする所へ、此家の主婦らしい女が、細ひ竹の荒い格子で仕切つた、其の格子の間より陶器の鉢や銚子が顔を窺かせてゐる奥から、茶を注いで持つて來た。

「おいでやす。——えらい好いお天氣で……。」

世辭笑ひしながら主婦は、妙な眼で私達を見た。

「あ、好いお天氣になりましたねえ。——何うも昨日のやうに降ると旅行の者は真から困りますよ。」

と、好い話相手を見つけたやうに、ニヤ／＼しながら、三作

は茶を呑んだ。

「さうだすとも。——しかし、何だッか、昨夜は有馬だしたンか」

「え、有馬でした。」

「けども何だすやろが、此頃は有馬へお客さんが、餘りに行つとッてや無いさかい、損だすやろが。」

「え、損?……。」

三作は、可怪な顔をした。

「否え、淋しいよッてに、入りがおまへんやろが……。」

「あッ入りがですかい? ウム入りは、頭からありませんでした、しかし、這麼堅氣な扮装をしてゐるのに、如何して其處とが分ります?」

偶と考へついたやうに、妙に、——笑ひの含んだやうな眼で私を見ながら、三作は返事をしたが、まだ私には、それが何の事が皆目分明なかつた。

『ホ、ホ、ホ、分明まへいで。——何麼堅氣らしい扮装しとてだしても、何所か、違ひますさかいなあ。』

『違うッて、何所が違ひます？』

『否えさ、早い話が、あんた達の着とつてのお襦袢かて、粹なやおまへんか。』

『え、襦袢が……。』

と、三作は、慌て、裾を蔽ひかけて、意味ありげな視線を私に送つたが、私は、それと氣付くと、馬鹿々々しい、と言ふよ

りも、荒い紅入り模様の長襦袢の裾を見て、早計な觀察を下した主婦の顔が、吹き出せるほど可笑かつた。

『悪い所を見ましたねえ。だが、主婦さんの天眼通には、眞個恐れ入りましたよ。』

『さうだすやろが、しかし、新俳優だツか？』

『え、——否え、浪花節です。』

また三作は、私の顔を見た。

『あ、此頃流行の……。そして何だツか、あんた等兩人だけだツか？』

『否や、連中は外に四五人ゐますが、後になつてゐるんで……。』
調子に乗つた三作は、口から出任せのあてすッぽを眞面目な

顔をしながら言つてゐると、向ひ側の面炮も、面炮の相手をしてゐる女も、それとなしに聴いてゐる。……

主婦が、茶のかほりを注いで来てやうと立ちかけるのを待つてたやうに三作は、敷島の吹あましを火鉢へ突込んで、

『あの、主婦さん、餛飩を二つ下さいな。』と、低聲で詠つた。

『あ、お餛飩は、えらいお氣の毒だが、今日は拵えまへなんださかい、かはりに出来たてのお餛飩がおまんが、何麼もんだすやろ?』

『え、餛飩が? さうだねえ。』

何か呟くやうな眼で三作は、秘ッと私を見た。

『まあお口に味まへんやろが、一つ喰べて見とくなあれ。』

主婦は、藝妓のびらが貼つてある下の棚から、鉢を取出して店頭隅に玻璃張りの塵除けを上にした、料理臺のやうな所に街道へ向けて陳列してある、巻餛飩や押餛飩を取つて、巧みに盛り入れた。

私は、尠からず氣を揉んで、幾度びか、それとなしに、餛飩ならいらぬよ、と断らうとしたが、私の財布に七錢しか残つてゐないのを、よく知つてゐる三作が、飽までも落着き拂つてゐるのを眺めると、――また晝飯を喰ひに行かうと言つた時の、渠の氣分なり態度を考へると、まだ二三圓とまで行かずとも、一圓紙幣の一枚位の、或は袂の底に忍ばせてゐるのかも知れないと思つて、私は、不安に思ひながらも、黙つて三作の顔を眺め

てゐた。

鮎は、卓子の上に運ばれた。

「ウムこいつア美味い！ これなら酒が呑めさうだ。」
と、手で抓んで頬張りながら、三作は舌鼓を打つ。

「しかし君、七銭しか無いんだせ。」

主婦が茶を注いれかへに行つてゐる隙を覘つて、秘ッと私は囁
語いた。

「それや知つてるよ。」

「ちや、別に君あ持つてゐるのかい？」

「否や持つてやしないが、鎖に五圓附いてるから、心配し給ふ
な。」

「えッ、鎖に？……。」

偶と心づいた私は、慌てたやうに今更らしく、私の時計の鎖
の端に、メタル代用に附けて置いた、五圓の金貨を見た。

「ハ、ハ、ハ、さう驚くともないさ。斯う言ふ時の用意に持た
してあるんだから、遠慮せずに喰ひ給へ。何なら酒も誂つてや
るよ。」

「馬、馬鹿な！ 冗談ぢやない。」

と、言ひながら私も私は、悪いものに見込まれたわい、と思つた
が、もう斯うなつては取返しがつかないと考へたので、仕方無
く、それも溢々諦めて、勢ひよく箸取つた。

「ハ、ハ、ハ、到頭思ひ切りましたな、感心々々！」

『馬鹿！何が感心なものか！』

「またも三作の爲めに、まんまとしてやられたかと、むいやい
いやしてゐると、突然其の横合ひから、

『あの、君等は、今夜この三田で演つんかね？』と、三作の顔
を見ながら、向ひ側の卓子から、拂のやうに眞赧に酔つた色の
例の面炮は、威張つたやうな、横柄な口を入れた。

『え、御當地では是非御最負に預からうと思つてましたが、一座
の都合から、それが叶ひませんので……。』

「いかにも旅藝人と言つたやうな調子で、殊更ら頭を低く下げ
ながら、三作は、面白さうに應えた。

『ウムさうか。——ちや、何地で演つんかね？』

『へい其の……何地つて、其のまだ確と定りませんが、寶塚か
池田の町で、多分演るとになるだらうと思ひますが……。』

と、揉手しながら三作は、面白い鳥が引籠つたさばかりに、
嬉しさうな顔をして、曖昧な返事をする。私は、思はず吹き出
した。が直ぐにも、それや嘘ですよ、と言はうとしたが、考へ
ると面炮の口吻が、癪なほど我々に對して敬意を失してゐるか
ら、寧ろこの場合其の三作の人を茶にしきつた應え振りが、私
の耳裡に痛快に而も其の當を得たものゝやうに響いたので、私
は、俯首いたまゝ、じつと可笑さを堪えて聽いてゐた。

『ちや、これから、行くんかね？』

『へい左様で、其の汽車を待つてゐますんで……。』

(70)

「さうか。僕も汽車を待つてゐるんだが、しかし、不躰で失敬だが、一杯如何だ呑ませんか。」

敬れてゐるやうな、案外丁寧な應え振りを得た面炮は、さも満足らしい色を酔の上には、これ見て呉れと誇るがやうに時々前に据えつけた安白粉の顔を見ながら、三作の前へ酒杯を持つて来た。

「さあ受け給へ！」

と、言つてゐる後から、安白粉は妙な微笑を洩しながら、酌をした。

「やあ、これや何うも濟ません。」

「何に濟むも濟んもあるものか。——何なら、君、失敬だが、此ら

方へ來給へな。」

「それでは……。」

「構ふものか。袖ふり合ふも多少の縁さ。さあ來給へ。——え、君も來給へ。」

三作の香乾すのを見た面炮は、熟柿臭い息を遠慮なく吹きかけながら、いよゝゝ調子づいて、傍觀してゐる私の袖へも手をかけた。

「君、四海同胞だせ！ 何も其處に遠慮するとはないさ。え、來給へと言つたら！」

(71)

頬に酔の涙の漲つてゐる面炮は、可笑いほど、安白粉の顔をチロ／＼眺めながら、到頭私と三作を自分の卓子に引張りつけ

(74)

た。
私は、腹立つと言ふよりは、呆氣に取られたやうな顔して、
三作を見た。

四 質浪花節の大迷惑

私達を引張りつけた面炮は、亂雑に置かれた卓子の上の銚子を横に振りながら、慌てたやうに、側に立つてゐる安白粉に向ひ、

(73)

「オイお梶さん、銚子を熱くして来てお呉れ。」と、吩咐けながら、改まつた調子で、私に酒杯を呉れた。けれど、餘りのとで馬鹿々々しくも、可笑く思つた私は、誰か知人が背後から、私の品性を嘲笑つてゐるやうな心地がして、三作のやうに、平氣で、赧い顔一つもせず、それを受取る事が出来なかつた。で

私は、唯簡短に而も處女が、見知らぬ男から、突然甘い囁きを受け、時々のやうな態度で、オド／＼しながら、あ有難う、と低聲で言つたまゝ、其の酒杯には手を觸れなかつた。

「君、呑んで呉れても可いちやないか。え、僕の酒杯は受取れぬのかい？」

面炮は、尠からず、不興氣な色をした。

「否や其麼とは……。」と、言ひかけると、傍から三作は、睨めつけるやうに、眼でしきりに何か傳へながら、

「旦那が、あんなに仰やるんだから、おいたゞき申しては如何だい？ え！」と、促して、自分の酒杯を面炮に返しながら、

「眞個其の何です、此の男ほど我々の仲間で、無愛嬌者は無い

んで……。だが、しかし、人間は見かけによらぬ極良いんですが、其の何うも、——藝人には珍らしい内氣な臆病者でして、いつもこれで一座の者は困るんです。」と、言難くさうに、幾度びか絶句しながら、半ば面炮に對して言譯けをすると言つたやうに、出任せの嘘を並べて、其の場の体裁を作つた。

「フームさうかねえ。——さうだらう、よく其麼男が、世間に往々あるものだ。」

三作に瞞着された面炮は、首肯いて、解つたやうな分明ない返事をしながら、底に酒の赤く燃えてゐる眼で、チロ／＼私の顔を窺むやうに眺めて、酒杯手にした。私は、いよく座にゐた、まらぬほど、可笑さを感じた。

『だが、しかし、折角注いたんだから、それだけは是非返して貰ひたいんだが……。』

思ひ出したやうに、また面炮は、鍍金の面も素度の眼鏡をキラさせながら、濁つた鈍い眼で私を見た。

『何故おいたいき申さないんだ？ 可怪な男だねえ。』

無理からでも呑さうとした三作は、咄嗟に私の口へ其の酒杯を持つて來た。

『さあ呑み給へ。』

もう私は、拒むとが出来なかつた。私が、酒杯を三作の手から受取つて、苦笑ひしながら、兎に角呑乾して了うと、面炮はいよいよ調子づいて、熟柿臭い口で、またも侷める。——私は、

既に盗泉の水を酌んだからには、一杯呑むも十杯飲むも同じとだ、と考へて、毒啖は、皿までと言ひたいやうな心地で、面炮と三作が侷めるまゝに、幾杯ともなしに續けた。

三作は、頼母しい後援者を得たやうに、勢ひづき、急に晴やかな色を酔の上に見現して、面炮が威張つた口を利けば利くほど以前に増して、殊更下手から、丁度安物の幫間か何ぞのやうにペコ／＼しながら、何一つ言ひ出すにも、旦那、旦那、と呼びかけては、面炮が横柄な首肯きをするのを見て、これほど面白くはないと言つたやうに、赤い舌を出さぬばかりな愚弄した眼で、秘ツと私を見る。けれど、馬鹿にされ、いゝ玩弄品扱ひにされてゐるのだとは、夢にも御承知のない面炮は、旦那、旦那

那、と而も安白粉の前で奉られるとが、無上に嬉しいのか、其の度毎に顔を崩して、俺はこんな偉い者だ、よく聽いて呉れと言はぬばかりに安白粉の顔を窺きながら、妙に肩を怒らしていよ／＼威張つたやうな、横柄な口を利く。——私は、苦笑ひしながら、面白き喜劇を看物席から見ているやうに、面炮の側に座を占めた安白粉に酌されては、遠慮なく酒杯の数を重ねてゐたが、果ては餘りのとで座にゐたゝまらず、便所へ行きたくなつたのを機會に、椅子から身を外した。

そして、暗い濕つたやうな土間を傳つて、裏の薄汚い便所で用を済し、半ば朽果てたやうな柿の木の根元に置いてある、陶器の手水鉢で、氣持悪く思ひながら、手を洗つてゐると、其の

背後へ三作が來た。私は、振顧るなり、

『オイもう好加減に癢せよ。馬鹿な！　そしてもう行かうぢやないか。』と、窘めるやうに促した。

『ウムまあ可いさ。さう恐い顔しなくたつて……。』

『だつて、粹興にも程があらア。——あんな田舎者に、旦那々々ツて、眞個我々の品性に關るぢやないか。』

『ハ、ハ、ハ、さうだらうよ、君あ孔子やお釋迦さんの御親類で、大層御品性のおありなさる方だから。』と、笑つて、急に思ひ出したやうな違つた顔をして『すまないが君、一つ例の浪花節を唱つて呉れんか？　え！　今ま約束して來たんだから、頼むせ！』と、言つたまゝ、歸りかけるから、私は、慌て、呼止

めた。そして、何か言はうとすると、またそれを遮つて、
『まあ〜可いさ、旅行の耻は掻棄て、それが面白いのぢや
ないか、二度と来る所ぢやあるまいし、まあ我慢し給へ！ 折
角約束して来たんだから。——え、合點かい。』と、單り呑込みし
て、私が呆氣に取られてゐる顔を見ながら、裏口から店の方へ
入つて行つて了つた。

『馬ッ馬鹿にしてやがる。』と、呟きながら、手を拭うた私は、
いよ〜私まで、玩弄品にしやがるのか、と思ひながら、つゞ
いて前の座に戻つて行く……

『さあ一つ演つて呉れ！——旦那や、この姐さんの御所望で、
先刻程からのお待兼ねだ。さあ兄貴一つ頼むよ！』

と、私の手を捉つて側へ引付けながら、三作は言ふ。私は、
いよ〜馬鹿らしくなつて、直ぐにも頭から、馬鹿！ 失敬な
とを言ふな！ と怒鳴りつけ、此奴の言ふとは全部虚偽で、君
をいゝ玩弄品にして居るのだ、と面炮に對して素破抜いて呉れ
やうと咽喉まで出しかけたが、しかし、黙つて熟く考へると、
三作のやうに口でこそ露骨にそれと言はなかつたが、やはり私
も、最初にそれを打消さず、假令其の形式が無理強ひであつた
にしろ、兎に角其々に、而も幾杯もなしに酒杯を受取つてゐ
るからには、謂はゞ三作と同罪で、今更其麼どの言へる立派な
無垢な私でないと思つて、これや飛んでもない破目に陥込んだ
わい、と苦しませの苦笑ひをして黙つてゐた。

『まあさう難かしい顔せずに、更めて一杯受けて呉れ！』と、其の三作の言葉の後についた面炮は、自分の酒杯を私に送りながら『今ま聴けば、君あ彼の雲右衛門の一の弟子で、星右衛門と言ふんださうなが、是非一つ頼む！ え、聴かして呉れ！』と、天火のやうに酔きつた顔して、馴々しく私を見る。

『え、星右衛門？ 誰が？』と、言ひかけると、それを三作は遮つて、『否えさ、其麼とを言つて白ばくれたつて、もう君の名前の、桃中軒星右衛門と言ふとも何もかも、チャンと旦那に申上げたるんだから。――それよりか、早く一つ演つて呉れッたら！』と、言葉以外に、眼まで使つて、嶮しい視線を注ぐ。
私は、面炮の呉れた酒杯を手にしたまゝ、よくも這麼に巧く

嘘のつけたものだ、と暫時呆氣に取られて、茫乎と三作の顔を眺めてゐると、其所へ新しい銚子を持つて来た安白粉は、座につくなり、

『え、あんた早やう一つ聴かしてお呉んなアれな！ え、先刻から待つてまんのやで……。』と、手に持った私の酒杯に酌しながら、例のOsseineな表情をする。

『ウム僕も待つてゐるんだ。さあ早く聴かして呉れ、え、星右衛門君！』

面炮が乗出して来る後から、また三作が、妙に私を睨めつけながら、

『俺も咽喉さへ傷めてゐなきや、是非一席聴いていたゞくんだ

がねえ。——だが、しかし、あんなに旦那や、姐さんが仰やるんだから、一つ兄貴、後生だ演つて呉れ！」と、拜まぬばかりに言ふ。

『さあ、もう一杯熱いのを注ぎますさかい、早やう聴かしてお呉んなアレ！』

と、銚子を手にしたがら、安白粉は、またじれったさうに攻寄つて来る。——

斯う三方より、白刃を振り翳し、隊伍整々、旗鼓堂々として鋭く斬り圍まれて見ると、もう到底逃れる血路が無いと諦めた私は、敢て三作のそれに私淑して、真似るのではないが、旅行の耻は掻棄て、這處所へ二度と来るんぢやなし、と譯けもな

く考へて、えッ！馬鹿のしついでに、まゝよ一つ怒鳴つてやれ！と決心し、

『ちや一つ唱うから、姐さん、まあ熱い酒を注いでお呉れ！』と、傍にあつた茶呑み茶碗で、自乗から、つゞけさまに二三杯呷つた。

『イヨ！待つてました！』

と、私が茶碗を元へ置くのを待つて、言ひ囃す三作の後から昨日有馬で語つた、蓄音機の音譜から仕入れたと言ふ、「頃は元祿十四年、旬は彌生の中の頃……」と、次第聲張り上げて、殿中の刃傷の一節を唱つた。

『ウム巧い！中々好い！』と、面炮が感心したらしく言ふと

また安白粉も安白粉で、「ほんまに上手やわ、ほんまに可いわ。」と、例の Osborne な眼を睜つて、私に酒を注ぐ。

いつの間にか、汚れた藍染の暖簾の蔭へ来て聴いてゐた主婦までが、銚子のかほりを持つて来て、賞讃しながら、もう一つ聴かして呉れと言ひ出すと、面炮は、それを受けて、またも安白粉や三作と共に、私に語れと攻寄つて来た。

自棄に呷つた酒の胸に躍つてゐる私は、一度唱うも二度語るも同じとだと思つて、首肯しながら、破れ聲振り絞り、大高源吾の、「世の中を何にたとへん飛鳥川……」と言ふ、笹賣りの上の段の一節を語り出した。

が、謂はゞ私の聲巧者から唱うものゝ、其の實、浪花節を野

卑拙悪の一つに數へ込んでゐた私は、或人から音譜ぐるみ蓄音機を譲受けてからでも、常盤津や、長唄や、清元や、歌澤や、端唄などの音譜こそ、音のかすれるまで鳴らして娛しんだものの、其の中に浪花節の音譜が三四枚、まだ新し顔してまぢつてゐたが、喰はず嫌ひして、何と言ふともなく、丁度女郎屋の御亭が飛んだお茶挽きを抱え込んだやう、澁面して頭から願見やうとしなかつたが、流行ッ妓の多くは、所謂過度の労働や激戦の爲めに、或は倒れ、或は病みこんで、もう昔日の花やかな面影を失つたから、と言つて、新妓を仕入れるのもたいぎだし、と言つたやうな上から私は、面白くもないがと思ひながら、偶と蓄音機にかけ、唯一時の氣まぐれな好奇心から、冷かすやう

な心地で、面白半分おもしろはんぶんに、其の歌の文句ぶんくや節ふし付けの真似まねをして見ると、いとも容易やすく我われながら奇異きぎに思ふほど巧たみに真似まねられたのが、抑おさの最初はつまつで、其の後真似まねられるてふ浮氣うきな興味きょうみにそゝられて、二三度たび、——唯表面ただうへさへ變かはつてゐれば、無上むじやうに珍めづらしがる趣味しゆみ性の卑ひい世よの俗惡ぞくあくに投なげんと企くはて、何とか道みちの鼓吹こすい、と氣きの小さい男おとこは忽たちち膽いそを潰つぶすやうな、木きに竹たけついだ變へんて、な銘めいを打うち、芝居しばいの由井正雪ゆいしょうせつよりも頭髪かみを長く背後せろへ垂たらした變へんな人の語かたる浪花節なはなせつを聽きいて、何なにうにか斯かうにか其の呼吸こきゅうを吞のみ込こんだぐらゐだから、さて語かたり出だしたのは可いいが、「花はなと散ちりにし我わが君きみの……」まで來くると、次つぎの文句ぶんくを忘わすれ急きうに行止ゆきどつたので、これや困こまつたわい、と無理むりから出でぬ咳せきを幾いくつともなしにつゞけ

て、胡魔化こまけしながら、記憶きおくを惹よび起おこさうとしたが、狼狽ろうたえば狼狽ろうたへるほど、記憶きおくの絲いとは紊みだれ出し、如何どしても思おもひ出だせないので、横着わうちやく至極しごくにも文句ぶんくを飛とばして語かたつたが、しかし、誰たれもそれを知しる者がなかつた。

私が、冷汗ひよあせをかきながら、語かたり終はると、またも感動かんどうしたらしい聲こゑが洩もれて、酒杯さかづきが舞ま込んで來くる。私は、可笑おかしく思おもつて、それを受うけてゐると、寢呆ねぼけたやうな音おとの柱時計はしらどけいが、三時じを報はじつたから、も發車時刻はつしやじこくに五分ぶんしか無いと、慌あわて、主婦おかみに勘定かんじやうを命めいじた。

そして、前の座まへへ戻もりかけると、面龐おもてが突とつ然ぜん、

『あ、可いいよ。僕ぼくが一緒いっしょに勘定かんじやうするから！』と、制せいするやうに

主婦に言った。

「だつて、其麼とは……。」と、言ひかけると、主婦は、妙な意味の含んだ眼で、

「可いやおまへんか。あんなに言つとつてやさかい、奢つて貰ふときなアれ！」と、軽く睨めつけるやうに私を見た。

馬鹿な！ と、一言の下に跳付けるなれば、跳付けられるものゝ、しかし、七銭しか持つてゐない私は、此所で私の命じた通り主婦が、鮎代の何程かを言つて了へば、忽ち赧い顔をして何か言譯けがましい言を並べながら、帯に絡ませた時計の鎖を描き出して、メタル代用に付けて置いた五圓の金貨を外さねばならぬやうな、至極体裁の悪い破目に陥入らねばならぬから、

如何したものであらうか、と考へたが、さて何程二度と再び來る所でなし、旅行の耻は搔棄てだ、と自分勝手な所謂達觀をして、了うにも、まだ何程か「自己の權威」てふ、四角四面な虚勢の影のつき纏つてゐる私には、オメ／＼と見知らぬ而も土臭い生意氣な男から、拂つてやると言はれて、平氣でそれに甘んずるだけの糞度胸は無し、と言つて、耻を搔く破目に、自から求めて陥込みに出るのも、何となく立負れがするまゝ、當惑して如何すれば可いかと相談するやうな面容で、まだ安閑と面炮の前に尻落着けて、酒を呑んでゐる三作を見た。

其の私の視線が三作の酔つた眼に注がれると、渠は譯けもななく打消すやうに、

「折角旦那が、あんなに仰やるんだから、お辭義なしに御好意を受けやうぢやないか。」と、澄しこんで言ふ。

「だつて、それぢや餘りに何だから……。」

一種の羞耻を感じた私は、懷中をさぐる眞似をした。

「可いよ！ 僕のは帳付けなんだから。」と、また面炮は、制するやうに言つて、『ドレ徐々行くとしやうかな。』と、呟くやうに

言ひながら、傍に置いてあつた花模様の手提靴を取上げかけやうとするど、巻煙草を燻らしてゐた安白粉は、偶と考へたやうに、例のObsceneな眼で、何か秘々と面炮の耳の傍で囁語いてゐるから、それを機會に、

「何うも旦那、相濟みませんでした。」と、斷はるやうに三作は

お叩頭しながら、椅子から身を離しかけた。

「君、一寸待つて呉れ！」

と、安白粉の囁語きに、軽く首肯きを與えた面炮は、慌しく

三作を呼留めながら、安白粉の帯の間から薄い紙を貰つて、何か包んで、『これや甚だ些少いけれど……。』と、ひねつた紙を抛出した。

「え、何ですつて？」

三作は、訊答めるやうにそれを見た。

「否え何さ、甚だ些少いが、纏頭だ、取つて置いて呉れ。」

「冗、冗談ぢやありません。そんな御心配は……。」

「何可いよ。取つて置いて呉れたら！」

其の當座私は、それを追想する毎に、吹出しながら、いつも冷汗の思ひをしたが、しかし、人の胸の一隅に建てられた記憶の倉庫の底を絶間なく洗ひ崩して、次第に忘れの世界へ流して行く月日が、いつか私の知らぬ間に、其の思ひを浚つて行つて了ひ、唯私の記憶の懐しい杭にかゝつて流れ残つたのは、大山三作がゐればこそ、あんな思はぬ面白いお茶番旅行が出来たのだと言ふだけであつた。

で、私は、今度び、——久しく閉込められて頭腦を悩ました激務の窓から、少閑の町へ解放されたので、斯う言ふ疲れた頭腦を

休めるのは、自分の財布の紐を解きながら、誰かに見ツかるが最後、頭を搔きつゝ、あれや交際上已むを得ず、とか或は、浩然の氣を養ふ爲めに些つと其の……、なごゝ馬鹿らしい言譯けの要る、煩瑣な所でなく、十日間が無理なら、たこへ五日間でも、大びらに、それも何所へと言ふ目的なしに、唯興味の導くがまゝに脚を運ばし、たはいもない、無邪氣な、浮世離れのした面白い、——有馬へ行つた時のやうな旅行をするに限ると思つて、久々で大山三作が、私の書齋へ、人を茶にしたやうな些の些しく下つた顔を窺かせたので、さう話すと、勤めてゐた會社を退いて、當時また醫者の安藤と言ふ伯父の家に遊んでゐる渠は、一もなく、奢るんなら一緒に行かぬとはない、と早速賛成

したから、私は、兎に角渠を私の旅行の道伴れに飾つた。

其の伯父の衣裳を着込んで来たのではないかと疑ふやうな、濫い立派な飾した服装をして来た、大山三作と共に、激務が特に支拂つた金の中の何程かを懐中に扭込んで、私が宅を出たのは、四月の中旬過ぎの、甦つた明るい日光が、白く街路に燃えてゐる、晝飯後であつた。

出立祝に傾けた酒の皮下に熱つてある私達は、柔かく音もなしに吹いて来る春風に、心地好く頬を撫でさせながら、米の粒を拾はんと、いどいど慌しく驅過ぎ、驅越して行く、餘裕の無い都會生活者の氣の毒なほど淺猿しい姿を尻目に向け、今ま將に私達の前に展開されんとする、新しい世界のさまふゝを描きつ

つ、梅田の停車場へと俥を走らした。

そして私達は、汽車の時間の都合から、上り列車に搭じて、兎に角京都まで脚をのばすことにした。

五 櫻の零るゝ保津川

懸て七條の停車場へ着すると、急に三作は、構内に掲示された廣告を見て、嵐山行きを主張したので、何所へ行くと言ふ目的の無い私は、何所へ行くのも同じとだと思つて、渠の言ふがまゝ柔順に切符を買足して嵯峨行きの花見列車へ乗替えた。斯くて私達は、櫻が山一面にさゝやいてゐる嵐山へ、程なく運ばれたのであつた。――

葦簾張の庇に吊された、「花見團子」とか「木芽田樂」とか、さまざまの美し繪文字で記した紅提灯が、人波打つた花見客の蹴たてる白い塵埃を浴びて、ゆらく揺れてゐる掛茶屋の、赤毛布のどりくに敷いた床机の列から、殊更人目を浮立たせるやうに、赤い襷に赤い前垂掛をした姐さんが、戸毎に佇立んで半ば汗に塗れた白粉の顔をふりたて、そろく押流されるやうに、間断なく行過ぎる花見客を、黄ろい京訛りの聲でかしく呼込んでゐる。

汽車の動揺と混雑から吐き出された私は、斯うした旅行の與へる、ふしぎなほど軽い、生々した鮮な、気分を感じながら、三作が、侮蔑するやうな調子で、其の呼たてる姐さん達の京訛

りの眞似をして、椰掬うのを敢て制しやうともせず、寧ろ面白可笑しく思つて、人波に揉まれながら、落日を受けた春の澄きつた蒼空に聳えた、川沿の大きな松の群は、まだ伐出されて間もない、新しい光つた材木の七八本づゝ一列に束ねた筏が、下に幾つともなしに浮んでゐる廣々した保津川の清流へ、さながら舞踊のしなやかな手ぶりを偲ばすやうな枝を望ませてゐるのを唯何と言ふともなく横に見て、細長く架つた渡月橋を渡りながら、一体に展開された前面の、櫻が湧いてゐる静かな嵐山を眺めると、覺えず胸が開けるのを感じた。

が、汽車の動揺と、群集の蹴上げる白い塵埃を浴びた私は、些しく草臥れたやうでもあるし、第一、酒の香がなくては、折

角花から享ける温かい興趣も薄い、と思つて、さながら飢ゑた人のやうに、酒、酒！ と心に叫びながら、やはり人波に押されては、くゞり抜けるやうにして、辛つと八分通り渡ると、中島公園とかと言ふ、中洲になつた積が橋つゞきにあつて、其所にも例の掛茶屋が賑やかに軒を並べてゐたから、私は、三作を促して、つと橋の路から右に反れた。

そして、掛茶屋の流れに面した奥の床机に陣取つた私達は、塵埃臭いやうな肴を二品三品取つて、それでも心地よく打興しながら、時が漸次に黄昏近くすべつて行くのも忘れて、幾本となしに壘詰の酒を傾けてゐたが、私より何程か酒正直な三作は早や顔を眞赤に染出して、何か呟くやうに歌を唱つてゐたが、

反響の無いのに倦み果てゝか、大きな欠伸をして、突然思ひ出したやうに、京都の奴等は、みな吝嗇で、肴を年に一度か二度ぐらゐきや喰はないんだツてねえ、と大きな聲で訊くから、私は、何氣なしに、真逆さうでもあるまいが、しかし、京の朝粥と言ふから……と應えながら、偶と向ひ側に眼を移すと、美々しく着飾つた婦人を伴れた客が、綺麗な蒔繪の重詰を開いて、乾瓢や高野豆腐や椎茸や湯葉の煮しめたのを、つゝましやかに箸で挿み、低聲で何か囁語しながら喰べてゐるから、さてはこれにあてこんで三作は言やがつたのだな、と直ぐ考へた私は、悪い返事をしたものだと思つて、もう言ふな、とばかり目で制したが、私が制すれば制するほど、また其の客が妙な顔をすれ

ばするほど、いよゝゝ三作は、調子に乗つて、面白さうに言囃す。が、表面でこそ一廉大人びて制すると言つた真似をしてゐるものゝ、其の實、——三作の辛辣を極めた奇警な京都人に對する批評と、其の鋒先にあてつけられて、妙からず面を喰ひ忿懣の色を浮べてゐる妙な顔とを見くらべた私は、酒の與へる賑やかな興趣の一つとでも言ふものか、唯何となく、それが可笑く思はれて、残りの酒を傾けてゐた。

兎角する間に、そこ〜と其の客は、伴れて來た十三四の、腰に大きな縫上げのした、チャラ〜音のする雪駄を穿いた丁稚に、件の重箱や小さな瓢箪を持せて、睨めつけるやうな眼を私達の前に残しながら出て行つた。

幾本かの酒と、前に並べられた肴を悉く平けて了つた私達は
そこ好加減にきりあげて、噪いだお世辭の聲を背後に聴きなが
ら、つゞいて戸外へ出た。

そして、酔心地よく、花に浮された人々が、そろ／＼歸つて
行く姿を見送りつゝ、歩き難い磧の砂礫を踏んで、對岸の櫻に
酔つたやうな調子で、ゆるやかに流れてゐる水邊に歩を運ばし
た。

いつか漸次に、四邊に罩つた暖かさうな霞が薄れ出すと、逝
く春を惜む歌を賑やかに唱つてゐる、對岸の嵐山の裾から、見
上げる限り山一杯に包んだ櫻の色褪し花瓣は、何所からともな
しに吹いて來る、迷つた夕風に誘はれて、はらく／＼と吹雪の飛

び散るがやうに、奥の方の山と山との間の薄く靄つた底を縫ひ
ながら、やはり其の夕風に誘はれて、時々微笑むやうな小波を
西東となく所々の川面に走らせつゝ、嵐山の裾から出た岩の足
を綺麗な澄きつた水でペチャ／＼洗ひ、音もなく流れて行く保
津川の水面に落込むさまを、磧の砂礫の上に蹲んだまゝ、私
は、さながら遠い繪の國に遊んでゐるやうに、何とも言へぬ心
地になつて、見惚れてゐた。

一しきり迷つた夕風に弄ばれた花瓣は、ゆらく／＼と空に舞散
つてゐたが、やがて静かに、はらく／＼と水面に落ちて浮ぶと、
またも吹き出す夕風に誘はれて、梢から競ふがやうに、何の執
着もなく散つては、同じやうなを繰り返して、小波の走つて

みる水面に軽く浮ぶ。そして、流れの導くまゝ、小波の駆行くまゝに従つて、些の辭する色もなく、従容として、水色縮緬の上、櫻の花弁を染出したやうに流れて行く……

「オイ、もう行かうぢやないか。」

と、側に佇立んでゐた三作に、突然促された私は、夢から醒めたやうに、其の倦ずに茫乎として眺めてゐた水面から眼を離した。

「何を考へてゐるんだ！ え、さあ行かう。」

また三作は、つまらない、と言つた色をして促した。

「ウム、ぢや行くどしやうかね。」

と、眩くやうに首肯いて、腰を返すと、もう薄い黄昏の色は

一丁の彼方まで押寄せてゐて、夢の繪の中に浮んだやうな、彼方の對岸の旅宿や料亭の二階からは、早やチラ〜と美しい澤々した燈灯が閃いてゐる。

酒に浮された上に、水の流に望んだ櫻に酔うた私は、冷やかな灰色の現實の世界から遠く離れた人のやうに、言ひ知れぬ晴々した心地になつて、踏難い磧の路をステツキで支へながら平素私の愛唱する、「面白の花の都や、筆に書くともお及ばし、東には、祇園清水落くる瀧の、音羽の嵐に地主の櫻はちいり散り……」と言ふ、謠曲「放下僧」が、歩み出すにつれ、自然に朗な調子で、我知らず謠え出した。

賑やかに軒を列ねた掛茶屋は、漸次に忙しく手を擴げる夕闇

に急がれてか、通り過ぎる人々に、もう生々した黄ろい呼聲を浴びせかけるでなく、奥深くひそんで、しきりに客に供へた後の器物を音させながら、洗つてゐる。しかし、時々思ひ出したやうな聲で、奥から呼んでゐるのを聴流しながら、三作の後についた私は、もとの渡月橋へ戻つて来た。

が、漸次に薄れた人混は、嵐の吹き渡つた後のやう、いつか煙りたつた白い塵埃もおさまつて、私達が酔心地よく渡り返して行く、渡日橋の橋板も、白々どかなり遠くまで望まれた。七分通り渡り返した私は、別れを惜むやうに、また振顧つて、つと左手の欄干に凭れた。

蒼く澄きつた水は、ゆるやかに追ひ追はれてすべつてゐる彼

方には、白く一体にぼかしこんだ櫻の群から、静かに顔を出し嵐山は、春の觀樂に酔潰されたやう、早や夕闇の蒲團を被て眠りかけてゐる。……

私は、甦つた夕風に頬を撫でられながら、私にも譯けの分明ぬやうなことを頭腦に描き出して、倦ずに嵐山の方から、川上一体に聳えた黒い山の薄靄の帯占めた姿を、欄干に兩脇ついたまま、眺め入つてゐると、もごかしさうに三作は、また急きたてた。

『蒼蠅い男だねえ。——まあ暫時、凝乎と黙つて、この景色を見給へ……』

半ば叱するやうに言つたまゝ、尙も私は見惚れてゐた。

『ウフ、柄にも無いとを仰しやるんだねえ、ハ、ハ、ハ。』と、茶化して、急に考へたやうに首肯しながら、『ちや一層のと、此所で泊らうぢやないか。』と、三作は眞顔で言つた。

『ウムさうだねえ、しかし、随分混合つてるだらうが？……』

『何に、大丈夫だよ。一人や三人ぐらゐは充分に泊れらあ。』

『だつて、お粗末なのは厭やだからなあ。』

『何さ。……まあぐづく言はずに泊るんなら泊るで、早く來給へ。』

今宵こそ、京都へ來たのを幸ひに、何所か静かな、——木屋町あたりの、路次の奥まつた一室で、倦くほど甘い眠りが貪つて見たいと考へてゐたが、さて斯う言はれると、これからまた彼

の人混の汽車なり電車に揺られて、わざ／＼泊る爲めに、京都の市街へ出るのも臆切だ、と譯けもなく胸に浮んだ私は、この逝く春の懐しい花に對立した彼岸の宿で泊るのも、また一興だと思つて、渠の言ふがまゝに、欄干から離れた。

そして、渡月橋の橋だもとを左に、大きな松が三四本保津川に面して斜に首を伸してゐる道路を辿つて、三階建の表構へした、奥には絃歌のさんざのいてゐる、大きな家の、山のやうに下駄の並んである玄關口に突出つた。

すると突然、隅に蹲まつてゐた印裱纏の下足番らしい若衆がムク／＼と起上がつて、『お客さんゴッせ！』と、ざわついた奥へ怒鳴つて、三作に下足札を渡しながら、私達の下駄を受取ら

うとしてゐると、そこへ慌しく一人の女中が駆付けて来た。

『あの、折角ですが……。』

と、腰をかゞめて、言難さうに言ひかけると、其の後側の段梯子から降りて来た年増の女中が、それを見て、『あ、お客さんなら、二階の七番が、今ま空きましたえ。』と、制するやうに言つた。

『あ、さうでしたか？』と、軽く振顧つて、些しく赧い顔しながら、『そしたら、何卒……。』と、私達を迎へた。

半ば下駄を脱ぎかけてゐた私達は、互ひに苦笑ひしながら、其のまゝ、女中の後につゞいた。

二階へあがつて、廣ッべたい廊下から、街路に沿うた片隅の

八畳の座敷へ行くと、まだ餉臺の上には、前の客が喰荒して行つたまゝの器物が、所々へ零れた汁と共に、亂雑に棄てられてあつた。

『まあ、——一寸お待ちやしと呉れやすえ。』

と、女中は、手早く其の器物を掻集めながら、側にあつた廣蓋に移してゐると、

『お静さん！ 十四番さんのお手が鳴ッとおすえ。』と、ばたばたと絶間なく忙しさに廊下を駆過ぎる、ざわついた奥から、けたゝましい聲がする、とまた、『お静さん！ お静さん！』と違つた黄ろい肝聲が入つて来る。

『はい、只今……。』

と、大きな聲で應えて、搔寄せた器物を廣蓋に乗せた女中は私達を忘れたやうに、慌しく出て行つた。

私は、呆氣に取られたやうな顔をして、前に棄て、あつた座蒲團を足の爪先で裏返しながら、兎に角疲れた腰を下した。

天井より吊された電燈の灯が、輝き出すにつれ、前と横とに閉された障子の玻璃へ、微に映つてゐた戶外の色は、漸次に黒い底が出来て、電燈の灯を受けた私達の顔が、其の玻璃にまさまざ描き出された。

自棄から燻らした煙草の匂が、室内に咽びついて、も私の敷

島の袋も空になつた。――

けれど、笑顔の一つすら碌々見せもせず、そッけなく出て行つた女中は、いくら待つてもお茶一つ持つて来ないのみか、臆をついて、うち寛ぎたい餉臺の上すら、まだ前の客が汚して行つたまゝなので、幾度びとなく、自然私の口から、三作の頭へ不足のまじつた愚痴が零れた。

『だつて仕様が無いさ。――僕も最初から、こんな失敬な家だとは夢にも思はなかつたんだから。』

また三作は、腹立たしげに、火花が散るかと思ふほど烈しく手を鳴らした。

が、時々、――隣室一杯に充された客が、愉快さうに笑ひさ

めく聲と、廊下を忙しげに行き過ぎる雑然とした草履の音とに交つて、間の伸たやうな悠長な返事があるのみで、皆目それらしい聲すらしなかつた。

それ見ろ、と、またも嘲けるやうに苦情を言はうとする途端三作は、舌打ちしながら、

「畜生！ 好し、馬鹿にしやがるんなら、しやがるで、此方にも心算がある！」と、誰もゐない襖の外へ對つて威嚇すやうに呟いた。

六 悪戯のお蔭で仇討

今更ら歸ると言ひ出すのも、餘りに野暮染みてゐると思つた私は、半ば諦めたやうに、如何でも勝手にしろ、と言ひたい心地になつて、微に對岸の嵐山の麓から、廣い保津川の流れを渡つて、前の障子の玻璃へチラついて來る咽びかへつたやうな灯を噴めてゐた。

すると突然、私の座敷近くの廊下へ、女中の噪いだ囁き聲が、零れたかと思ふと、一時間足らず忘れられてゐた襖が荒々しく開いた。

「あの、えらいお氣の毒におすけど、お隣室のお座敷が空きま
したよって、何卒おかはりやしと呉れやすな。」

前の女中と違つた、丸鬚の年増の女中が、鬪越に採手した。

「え、何ッ？」

三作は、險しく訊答めた。

「否え、あの、えらいお氣の毒さんですが、是非此室が要るん
ごすよってに、お隣室のお座敷へ……。」

急に、三作は黙つて、其の女中の顔を睨めつけるやうに瞞め
た。

「如何ぞすやろ？——おかはりやしと呉れやすな。」

また甘へたやうに言つた。

「不可ない不可ない！——誰が、こんな馬鹿々々しい、さんざ
食客扱ひにされて、素直に、さうですかッて肯く奴があるもの
か。」

「え、食客に？……」

細い目を圓くした。

「さうぢやないか。一体全体僕等が、此家へ来てから、何時間
待呆けを喰はされたと思つてゐる？ え、オイ！ 俺の掌はこ
んなに赧くなつてゐるんだぞ。それに辛つと出て来たかと思へ
ば、座敷をかはつて呉れ、——誰が、そんなを素直に、はいは
いと肯く奴があるものか。まあ考へて見るが可いや。」

「へい、——そら、ほんまに濟まんごしたけど、お見掛け通り

一ツ時になつたもんどすよつてに、つい……。』
女中は、腰をモジ／＼させながら、哀願するやうに私の方を
見た。

『ちや何かい、他の客は大切で、俺等兩人は棄てゝ置いてもか
まはないんだねえ？』

『否え、決して其麼とはおへんのごすけど、何分其のお見掛け
の通りで、行届きまへんで……。』

いよく女中は、當惑したらしい顔を見せる。

最初から傍觀者の位地に立つともなしに立つた私は、飛んだ
面白い談判が始まつたと言はぬばかりに、一は其の女中へ對し
ての、——好い子になりたい、と言ふ淡い体裁から、三作の持つ

てゐた残りの敷島を抽き出して、素知らぬ顔で燻らしながら聽
いてゐたが、しかし、三作が烈しく言ひ罵つてゐるのに、いつ
までも同伴の私が、素知らぬ顔をきめこんでゐる譯けにも行か
ないし、また女中を苦しめるのも餘りに野暮染てゐると思つた
から、まだ尙も口角に泡を飛ばさうとする三作を遮つて、

『まあ／＼可いさ。あれだけ詫てるんだから、も勘辨してやり
給へ。』と、宥めるやうに制した。

そして私は、氣輕に座敷のかはることを承知してやつた。女中
は、魁つたやうに嬉しさうな色をして、幾度びとなしに頭を下
げながら、急いで出て行つた。

まだ三作は、ブリ／＼怒つてゐる。——

辛つと宥めた私は、また違つた顔の女中に案内されて、隣座敷へ移らうと廊下へ出る其の途端、金縁眼鏡の若い男を中心に四五人の藝妓らしいのが、段梯子から、三作と談判した丸髷の年増に導かれてあがつて来た。

私達が、兎にも角にも餉臺を挿んで座蒲團に腰を据ゑると、入違ひに入つて行つた其の若い男と藝妓らしいのは、さながら敵の陣地を占領して勝誇ると言ひたいやうな、賑やかな笑聲を四圍に響かせた。しかし、渠等は、殊更女中を使喚し、私達をして、この小さい隣座敷へ激退して呉れやう、と真逆惡意をも

つたのではなからうが、私達が悄悄と屠所の羊のやう、さんざ待たされた結句の果て、この眺望の悪い而も小さい座敷へ引移つて行くのを、冷やかにそれも澄した顔で見送りながら、一言の會釋もなしに入つて行つた渠等を思ふと、いきほ私の静平でない胸は、其の笑聲が響いて來るに従つて、侮辱されたやういよく、忌々しく思はざるを得なかつた。

で、私は、苦蟲を嚙占めたやうな心地で、思はず三作の顔を見た。

疾く歡樂の夢が醒め果て、一種の疲勞と痛苦を感じてゐるやうな暗い面容をして、纔かに一本残つた敷島の煙を吹かしてゐた三作は、其の私の視線が眼に入ると、期せずして、大きな

舌打ちをしながら、

『いよ／＼馬鹿にしやがる、糞忌々しい！ だから、かはるなと言つたんさ。』と、險しく呟いた。

『ウムさうだねえ。——だが、しかし、も仕様が無いさね。』

『何、仕様が無い？』

『さうさ。——大体こんな家へ泊りこんだのが、我々の災難だから……。』

『ぢや何かい、君あ、あの笑ひ聲を聴いても癢にさわらないんだね？』

『——。』

『え、君！ これだけ虐待されても、君あ、何とも無いんだね』

え？』

突ッかゝるやうに、三作は言つた。

『馬鹿！ 生きてゐる以上は、誰だつて腹の立つのは同じとさ』

—— だけど、さう怒つて見たツて仕様が無し、また君のやうな

とを言つて了へば、いよ／＼二本棒扱ひにされるのが落だから』

と、言つてゐると、襖が静かに開いて、

『えらい遅なりました、濟まへんぞしたえな……。』と、白粉した美しい顔の、また違つた女中が、世辭笑ひをしながら、茶を持つて入つて來た。

そして、急須から移しながら、『ほんまに一ツ時になつてたものぞすよツてに、何卒お免しやしと呉れやすや。』と、言つて、

茶を侷めた。

「あ、我々のやうな、飛んだやぐさ客が紛込んで来て、眞個申譯けの無い次第さ。」

まだ三作は、腹立たしげな調子で、妙に皮肉つた。

「まあ、オホ、ホ、ホ、——よう其麼お口の悪い……。」と、笑つて、『しかし、お泊りごすか。』と、柔和な視線を私にそゝいだ。

「ウム泊めて貰ふと思ふんだが……。」

私は、茶をすゝりながら應えた。

「さうごすか。そしたら前にお湯へお入浴やすか？ 其の間に御飯を拵えて置きますよッてに……。」

「さあ、如何しやう？ 何なら前に入浴つても可いがね。」

「では、遅ならん間に、御案内しますよッてに、お出でやすか？」

「ウム行くとは行くが、しかし、また何だらう、餘程待たすんだらうが？……」

「否え、そんなとはおへんけご、直ぐお入浴やすのなら、一寸見て來ますわ。」

私の首肯くのを見た女中は、イッくとして出て行つたかと思ふ間に、早や襦袢を二枚廣蓋に乗せて戻つて來た。

「あの今やと、丁度空いとおすよッてに、何卒……。」

「さうか。ちや入浴るとにしやうかなあ。」

私は、思ひ切つたやうに起上がった。けれど、まだ三作は、

拗ねてゐると言つたやうに腕組したまゝ座つてゐるから、私はモロかしく思つて、口喧しく促した。

『仕様が無いなあ。——ちや、兄弟分の御挨拶に免じて、も勘辨して入浴るとにしてやらうかねえ。』

澁々三作も帯を解きかけた。

『ハ、ハ、ハ、風呂ばかりは、お氣に召さなくば一切押賣いたしませんよ。』

と、笑ひながら、短い襦袢と着かへた私達は、女中に導かれて、二階を降り、階下の長い廊下を傳つて、白くたて罩もつた湯氣に包まれた電燈のぼんやり點つてゐる、かなり廣い浴場へ行つた。

心のゆくばかり湯に浸つた私は、何とも言へぬ爽快な、軀軀に纏ひついた重荷を一時に下したやうな軽い落着いた心地になつて、揚板にゆつたりと腰を据ゑ、兩脚を前へ投出したまゝ、女中から借りた手拭へ石鹼を惜氣なく溶しつけ、手から胸、胸から背へと、傍目もふらず洗つてゐると、私よりも手早く洗ひ終つた三作は、馬鹿に粧すんだねえ、なごゝ冷笑すやうに言ひながら、また白い湯氣の和かに漂うてゐる浴槽へ浸つて、寝そべるやうに後頭を浴槽の縁へ凭せかけ、首より下を濁つた湯に浸しながら、小聲で何か譯けの分明ぬやうな俗歌を變な節付き

で、單り心地好げに唱つてゐたが、それが途絶えたかと思ふと
偶と首を擡げ浴槽の縁へ左腕を置いて、身を起しながら、

「オイ如何だ？　こんから一つ腹を空らす爲めの運動をやつて
見やうぢやないか。」と、突然私を見下した。

「何、運動？……」

私は、思はず洗ふてゐた手を止めた。

「否えさ、餘り癢だから、一番腹癒せにこの湯を汲出さうぢや
ないか。」

「—。」

「え、そして七分通り汲出して、この水道の水とかへて置きや
面白いぢやないか。え、如何だ賛成しないか。」

飽くまで三作は、澄した顔で言ふ。

「馬鹿！　そんなとが出来るものか。」

其の眞面目な顔を見上げた私は、思はず吹き出した。

「ぢや、賛成しないんだねえ。」

馬鹿々々しく思つた私は、返事もせず黙つたまゝ、また脚を
洗ひ出した。

「ハ、ハ、ハ、度胸の無え男だなあ。——好し、ぢや侷めないや。」

と、呟くやうに言ひながら、勢ひよく浴槽から飛出した。

「馬鹿だなあ。」

私は、我知らず呟いた。

「あ、君あ、おかしこい方だよ。」

と、手拭を絞つて、仰々しくも向ふ鉢巻をしながら、手を伸して直ぐ前の、花崗石作りの水溜の側に轉がつてゐた大きなバケツを拾ひ上げ、いきなり浴槽の湯を満々と汲出した。そして横の小溝の方へ打あけたかと思ふ間に、またも浴槽へバケツを突込んで、滾うがやうに汲出しては、同じとを幾度びとなしに繰り返す。……

餘りのとで、呆氣に取られた私は、渠が、白く四圍にたて置もる静かな湯氣を顔はしながら、眞面な仕事でもしてゐるやうな調子で、笑ひもせず一生懸命に汲出してゐる不格好な姿を眺めると、今更眞面目がへつて怒るとも出来ず、寧ろ可笑く思はれて、唯苦笑ひしたまゝ、それを制すと言ふよりも、誰かゞ見

て居りはしないか、と尠からず氣を揉みながら、洗ひ終つた。

三作は、倦ずに汲出してゐる。

『御苦勞さまですねえ。』

と、嘲笑うやうに言ひ棄てた私は、も一度温まつてから上らうと思つて、一つしか無い、其の波立つてゐる浴槽へ戻つた。

『オイ君、バケツがあたつても知らないせ！』

湯を汲出したながら三作は、忙しさうに言つた。

『ハイハイ。』

私は、柔順しく片隅の方へ浸つた。そして私は、心の裡で、容易にこれだけの湯が汲出し切れてたまるものか、私さへ相手にならねば、今に反響抜けがして、自分からバケツを投出すに

相違ない、と、まだ絶間なく汲出してゐる三作を嘲笑ふやう、冷やかに見返しながら、脚を投出して、氣持好くゆつたりと湯に浸つてゐた。

が、しかし、落ちてはゐるものゝ、漸次に湯が浅くなるにつれ、浴槽の内側が底近く見え出すにつれ、いよ／＼渠は、力づいたやうな誇り顔を見せながら、漸次に忙しく汲出しかけたので、も今は凝乎としてゐられぬまゝ、

『オイ冗、冗談ぢやない！ も好加減に癢せッてよ！』と、私は、あわて出さずにゐられなかつた。

『ハ、ハ、ハ、まあ、君あ黙つて見てゐるさ。』
『だつて、も黙つてられるものか。』

『ちや、勝手に喋舌り給へ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、僕あ、僕の運動をしてゐるんだから。——だが、愚圖々々してゐりや駄目だせ！』

澄した顔で、尙もしきりに湯を浚ひ出す。

私は、いよ／＼呆れかへつて、

『仕様の無い馬鹿だなあ。』と、言ひながら、そこ／＼と浴槽から飛出した。

『ハ、ハ、ハ、ハ、到頭敗北したのかい。——ちや僕も、これぐらゐで癢すとしやうかなあ。』

と、バケツを投出して、右手を伸しながら、横の壁板から浴槽へ望んでニッケルの光つた頭を垂れてゐる、水道の栓を捻つた。と同時に、迸しる音がして、瀧のやうに浴槽へ水は流れ込

む。――

『真個君の馬鹿には愛想がつきて、ものが言えない。』

と、笑ひながら、體軀を拭ひ終つた私は、浴場を出て、大きな姿鏡が電燈の灯を受けて光つてゐる、脱衣場へ戻つた。

そして、湯に酔つて晴やかな色した顔を姿鏡に映しながら、脱棄した襦袢を着てゐると、突然、

『もお上りやしたのどすか。』と、瘠けた頬の女中が、背後の廊下から聲かけた。

『あ……。』

軽く私は首肯いた。

『さうどすか。そしたら……。』

半ば言ひさして、慌しくペタ／＼と廊下に草履の音を發して消えて行つた。

何だ用ありさうに……。と呟いて、襦袢の上に細帯を結めて了つた私は、姿鏡に對ひながら、備え付けの櫛で、痒みを感じる濡れた頭の毛を掻き出すと、また草履の音が廊下に傳つて來たかと思ふと、何卒御ゆつくり、と言ふ、今ま先刻消えて行つた其の女中の聲がした。それにつゞいて、私の向合つてゐる姿鏡の底へ、濃い八字髻の黒い顔と、豚のやうにでぶ／＼太つた小柄な女の姿どが現はれた。

私は、尙も濃れた頭髮を心地よく掻きながら、何氣なしに振り返ると、私と同じやうな小柄の、襦袢を脱ぎかけてゐた八字髻

は、凹んで底光りする眼で、さながら驛出しの刑事巡査が、掏摸か何ぞを睨めつけるやうに、私の顔を眺めながら、

「オイ、如何だ風呂は熱いかい？」と、唐突に蔑しんだやうな聲かけた。

私は、思はず癢に觸えた。

「え、オイ、熱いかと訊くんだ。」

また八字髻は、モドかしさうに言つた。

いよいよ私は、此奴馬鹿にしやがる、と真から癢に觸え、誰がそんな失敬な口を利く奴に返事をするものか、と心に叫びながら、素知らぬ顔をして、また姿鏡に對ひ返した。

すると、八字髻は、拍子抜けのしたやうな聲で、此奴あ黽た

らうか、と着物を脱ぎかけてゐた相手の女に囁語きながら、荒しく浴場口の、市松張にした色玻璃の障子戸を開けやうとする途端、突然浴場から慌しく三作が飛出した。

「君、如何だ熱いかい？」

出會がしらに、また八字髻は、三作に訊いた。

「あ、好加減でせう。」

三作は、呆けたやうな顔をした。

「さうか。それや有難い！」

軽く首肯いて、八字髻が入つて行く後から、例の太った女も急いでついでいた。

三作のいたづらから、浴槽の湯が水になつてあると知つて

みる私は、思はず知らず吹き出しながら、あわてたやうに襦袢を着かけてゐる三作の顔を見た。と、同時に、揚板の上へかゝり湯の音が流れて、

『わあッ冷たい！これや水だ、水風呂だ！』と、狼狽えたやうな八字髯の喚き聲がした。

『あッ水だわ！』

『馬ッ馬鹿にしやがる。——オイ、コラ、誰か居らんか！』

と言ふ、怒鳴り聲と共に、烈しく手が、火のつくやうに鳴り出した。

私は、サマ見やがれ！と言つたやうな痛快を感じながら、飛んだ面白い喜劇が始つたばかりにこみ上つて来る笑ひを耐

えつゝ、我知らず耳を欬てると、横手から私の袖を秘ッと引張つて、片手で帯を占めながら、こそくと三作は逃げ出した。

七 災難多き嵐山の宿

「ハ、ハ、ハ、ハ、如何だい、僕のやる仕事は奇抜で面白からうがえ、感心したかい？」

私の座につくのを待つて、三作は笑ひ出した。

「馬鹿な……。」

と、言ひながらも私は、癪なほど横柄な面をして、知らずには被つた八字髯の消魂しい叫び聲を思ひ浮べると、笑ひ出すにはみられなかつた。

「それ見ろ！ 面白いのだらうが？」

「』。

「え、それに手傳いもせず、横着な！」

私の笑ひ出すのを見た三作は、いよ／＼調子づく。

「何に、そんなとが面白いものか、馬鹿な！」

私は、笑ひを耐えて殊更怒い顔をした。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ちや何の爲めにお笑ひ遊ばしたのだい？ え、いくら澄したツて、チャンと僕あ知つてるから、ハ、ハ、ハ、ハ。」

と、三作の笑ふにつれ、私も耐えかねて笑つてゐると、慌しく襖が開いて、私達を浴場へ案内して行つた女中が、外から白粉の顔を覗かせた。そして、薄氣味悪く私達を胸しながら、あわてたやうに、

『あの、あんたお風呂を水におしやサレまへんごしたか？ えらうお髻のお客さんが怒ッとおぬやすさかい……。』と、モジモジして言つた。

『否や、——僕あ知らないせ。』

三作は、急に眞面目がへつた色をする。

『さうですか。——そしたら誰方やろ？ 妙やなあ……。』

『何、妙なッて？』

『否え、今、其のお客さんが、お前の家は俺を馬鹿にしと居るから、こんな水風呂へ入れるのだ、も俺はこれから歸る、と、えらう怒ッて、謝罪りに出た係りのお光ごんや風呂番はんを毆打たり蹴つたり亂暴ばかりしとおぬやすけんど、しかし、貴方

はんのお入浴やした時熱うて、直ぐ水になる理由が無いよッてに、ひよッとしたら、悪戯おしやしたのかも知れんさかい、秘ッと訊いとお出でとお八重はんがお言やしたので來たんどすがほんまにお知りやヘンのごすか。』

女中は、頬に散つた鬢の毛を掻きあげながら、怪しげに睨つた。

私は、飛んだ事になつたわい、と尠からず氣を揉んでゐるとそれを聴き終つた三作は、いよく澄しこんだ顔をして、

『馬ッ馬鹿な！ 頼まれたつて、誰がそんな下らないとするものか。』と、一言の下に跳つけながら、『なあ君、そんなと言はれや、いくら蟲のいゝ僕らだつて、も黙つてられぬぢやないか。』

と、私に意味ありげな視線をそゝいだ。

『ウム……。』

この場合私は、唯首肯いて見せるより、他に施す術が無かつた。

『さうだらうぢやないか。あんな水みたいな湯へ入れて置きながら、よくも其塵失敬などが訊けたものだ。——だから、あの時熱くさせて置きや可いものを、君あ妙に同情して、これだけ立てこんでゐる時だ、野暮を言はずに、まあ辛抱してやり給へのイヤ行届かんのも無理はないのツて、自分一人一廉通がつて手さへ僕に叩かせず制めるもんだから、こんな馬鹿々々しい嫌疑を受けらるんだ。』

と、大きな聲で三作は、私を叱りつけるやうに言つた。

私は、此奴飛んでもないと言やがる、と思つたが、しかしこの場合怒鳴り返して呉れるとも出来ず、詮方無しに俯首いたまゝ黙つてゐた。

『そしたら、貴方はんらのお入浴やした時から、ぬるうおしたのどすか？』

『さうさ。冷たいの何ツて、丁度水のやうさ。だが、今も言ふ通りこの男が、これだけ忙がしさうにしてゐる時だ、まあ辛抱してやり給へ、と言ふものだから、仕方無しに我慢したんだがしかし、苟にもそんな失敬などを言はれて見れや、いくら何だつて黙つてられぬぢやないか。』

「まあ、さうごしたか。——そら、ほんまに濟みまへんごしたえな。」

女中は、狼狽へたやうに手をついた。

「だが、其の我々が悪戯をしたのぢやないかどあ、一体誰が言つてるんだ？」

「それですか。そらお八重はんがごすけんご……。」

「何、お八重はん？ それや何所の女だい？」

「否え、ホ、ホ、ホ、そら此家の一番古顔の、それ先刻貴方はんらにこゝのお座敷へかはつとお呉れやす、と頼みに來やはッた年増の仲居はんごすけんご、——しかし、此方が行届かんのどしたさかい、あの何卒お氣に觸えずに勘忍しとお呉れやすえ。」

と、女中は、幾度びとなしに頭を下げながら、「あの、直ぐ御飯を持つて参ります。」と、言ひ残して逃げるがやうに出て行つた。

そして、其の女中の琵琶音が段梯子から消えて了うと、私の顔を見ながら、三作はクス／＼笑ひ出した。

晚餐を喫して、散歩から歸つても、まだ隣室では、例の若い男を中心しに四五人の藝妓らしいのが賑やかに打興じて、盛んに酒を呑んでゐるばかりか、三味線の音さへ鳴つてゐた。

が、尠からず疲憊れてゐる私達は、それが癢だからと言つて

これから負けずに、假令男ばかりの空騒ぎにしろ、また酒を誂つて騒いで見るだけの勇氣もなく、と言つて、面白さうに隣室で浮れてゐるのを座つたまゝ、襖越しに聴いてゐるのも餘りに馬鹿氣てゐると思つたので、兎に角床をのべさして、寝るとにした。

そして、呟きながら枕についた私と三作は、暫時たはいもな
い雑談を繰り返してゐたが、聽てそれにも倦いた私は、いつともなしに眼をふさいで了つた。が、しかし、睡らうとすればするほど、隣室の騒ぎが耳に傳はると共に、今まで餘りに氣になかつた、片隣室の女件れの客の囁語き聲や、四邊の座敷の室
毎一杯に充された幾組とも知れぬ客のさんざめく物音や、忙し

さうにバタ／＼と草履の音たて、廊下を行過ぎる女中の足音までが、甦つたやうに枕に傳はつて、眼が自然に冴えて来る。――
けれど、騒々しいと言つて、いくら怒つて見ても、今更取返し
のつく譯けでもなし、また忙しげに草履の音たて、廊下を驅けて行く女中を呼び留めて、座敷をかへて呉れる、と言ひ出すにしても、これだけ立てこんでゐるからには、逆も私の望むやうな、静かな座敷の空いてある筈がないと思つた私は、折角樂しんで出た旅行の最初の日から、飛んでもない家へ泊りこんだものだ、と、さながら敵の罠へ陥込んだやうに一時は耐えられぬほど腹を立て、見たものゝ、さて翻つて考へると、三作に侷められたとは言へ、花見客を受けた宿の騒々しとを承知しながら

ら、逝く春の懐しい嵐山で泊るのも一興だ、と自分からも求めて泊つたのだから、これも謂はゞ災難の一つとして諦めて了ふより、ほか仕方が無いと考へて、また眼を閉つた。そして、今に隣室の肝高い三味線の音も騒ぎも静まるであらうと考へながら、斯うして眼さへ閉つてゐれば、纏て睡られぬともあるまいと、いつも精神が昂奮して睡れぬ場合によくやつて見る、一三三四の數を心で算へながら、無理から眼をふさいでゐた。すると、やはり三作も、其の隣室の騒ぎや、四邊のざわついた物音で睡られぬものか、舌打ちをしては、幾度びとなくゴソゴソと寝返りする音をさせてゐたが、いよ／＼耐えられぬやうになつたものか、『何うも癪だ。——これちや喧ましくツて、頭か

ら睡られやしない！』と、腹立しげに呟きながら、私の被てゐる蒲團の上へ手をあて、

『オイ、君あ、も睡たんかい？』と、しきりに揺つた。

が、些つとでも早く睡りたいと思つてゐる私は、返事をせず

に睡つたふりをして、黙つてゐたが、果ては頭へ手をかけて揺つたり、鼻を抓んだりするから、仕方無く眼を開いて返事をすると、三作は怒つたやうな顔をして。

『起てゐる癖に、何故返事をして呉れないんだ？』と、突かゝるやうに言ふ。

私は、此奴自分が睡られないものだから、飛んでもないことを吐しやがる、と馬鹿々々しく思ひながら、

「まあ、さう怒り給ふな。——誰だつて、斯う騒々しくツチャ、睡られないのは當然だから。」と、殊更おさまり返つた顔を見せた。

「ぢや何かい、我々の睡られないほど、こんなに座敷を占領しやがつた隣室の奴等が馬鹿騒ぎをしてゐやがつても、君あ、些つとも癢に觸らないんだねえ。」

いよ／＼三作は、腹立しげな色をする。

「それや誰つて同じとだが、しかし、さう癢に觸えたつて仕様が無いから、まあ辛抱して、僕のやうに諦めて寝るとし給へ。え、今に静まるだらうから。」

と、宥めながら私は、枕をかへして、また眼をふさいだが、

三作に揺られてからと言ふものは、妙に神経が昂奮つて来て、いよ／＼睡られなくなつた。で、一度便所へ行つてから睡るとにしやうと思つて床を離れたが、まだ三作は、興醒め顔をして腕組みしたまふ、蒲團の上に坐り返つてゐる。

「オイ、も好加減に寝たら如何だ？」

と、言ひながら、長い廊下を傳つて、奥まつた便所へ行つてゐると、いつの間に其の後をついて来たものか、突然私の背後から、

「君、今、僕あ、いゝものを見つけて来たぞ！」と、三作は、嬉しさうな聲をした。

「何、いゝもの？ いゝものツて何だ？」

私は、思はず振顧つた。

「否えさ。先刻から如何して腹癒せをして呉れやうかと、いろいろ考へてゐたんだが、偶と今、彼方の柱に絶縁栓のあるとを見つけたんさ。」

『——』

「で、そいつを捻りや、此家の電燈の灯は、一時に皆消える筈だから、一つ腹癒せにやつて呉れやうかと思ふんだ。」

と、三作は、澄した顔で言ふ。

「ちや、またいたづらをするのかい。——困つた男だなあ。」

と、手を洗ひながら、私は、苦笑ひをしてゐたが、しかし、浴場の一件ですら、尠からず氣を揉まされたのに、今、また其

麼飛んでもないとをされては、いよ／＼側にある私が迷惑だと思つたので、これや是非一緒に座敷へ戻らねば不可ないと考へて、三作が手を洗つて了ふのを待つて、直ぐ右手を捉えながら「オイ後生だから、も廢して呉れ。え、そんなとされちや、第一伴れの僕が困るから。」と、口喧ましく制して、引張りこむやうに座敷へ連れ戻つた私は、時間も時間だから、今に隣室の騒ぎも静まるだらう、と押へつけるやうに無理から三作を枕にかしめた。

そして、辛つと胸撫で下した私は、いつか知らぬ間にウトウトと睡りかけてゐると、遽に隣室から、また賑やかな三味線が鳴り出して、一齊に、「猪牙でエ、さッさい」と言ふ、例の若い

男の浮れ出したやうな聲を先頭に、残りの三四人の藝妓らしいのまでが、總立ちになつて踊り出したから、其の騒々しい物音が、地震のやうに睡つてゐる頭へ夥しく響いて、忽ち眼が醒めた。

すると、其の途端、天井より吊された電燈の灯が消えた。

オヤ、これや可怪い！と思ふ間に、今を盛んに踊り狂うてゐた隣室も一緒に灯が消えたものか、『あら！』と叫ぶ聲について、驚いたやうな、わざとらしい金きり聲がして、器物の轉る音や、壊れる音にまちつて、ごさくごさくと倒れる音がする。

と、思ふと、寝てゐる被蒲團の上から、私の足を踏躪りながら、あわてゝ入つて来た奴があるから、私は、我知らず。

「痛い！」と、叫ぶと、あわてたやうに蒲團の上から、
「あ、失敬々々。——今、餘りに癩だつたから、到頭やつて呉れたんだ。」と、低聲で三作は言ふ。

「ちや君かい。この灯を消したのは？」

「ウムさうさ。例の絶縁栓を捻つて来たんさ。」

「困るなあ。——だが、誰も見てやしなかつたかい？」

この場合私は、怒ると言ふより、それが氣にかゝつた。

「何に、それや大丈夫だ。——誰か他に見ッかるやうな鈍をするものか。」

と、囁語いてゐると、隣室からも、四邊の座敷からも、早く灯を持つて来い、と言ふ怒鳴り聲がして、一齊に女中を呼び喚

く火のつくやうな手が、烈しく鳴り出した。
 すると、狼狽えた女中の廊下を右往左往する草履の音が、慌
 しく私の耳一杯に響き出した。
 私は、其の氣の毒さと、可笑さに耐えかねて、思はず深く蒲
 團を頭から被て了った。が、三作は、おさまりかへつて、四邊
 の客と同じやうに手を鳴らしては、早く灯を持つて來い、と横
 着にも怒鳴りかへつてゐる。

八 汽車の中の大喜劇

「くだらない悪戯をするものだから、お蔭で僕ア、昨夜は碌々
 睡られやしなかつた。」
 と、吐きながらも、お客や女中が泡を喰つたやうに狼狽え出
 した騒ぎを思ひ浮べると、私は、笑はずにゐられなかつた。
 「何に、あれだけ騒々しかったんだから、如何したつて、昨夜
 は睡られさうな道理が無いよ。——それよりもお蔭さまで面白
 ございました、と正直にお禮を言ひ給へ、ハ、ハ、ハ、ハ。」
 「ハイハイ。」

と、傾けた朝酒の皮下に燃えぬが、つてゐる根い顔で、お互に
 たはいもなく笑ひながら、見るともなしに天龍寺や其の他二三
 の古びた名所を見物して、電車よりも瀛車の方が、いくらか氣
 がゆったりすると言ふ上から、朝の澄切つた空の日光を浴びて
 打興しながら、ぞろ／＼と嵐山の方へ流れて行く花見客の人波
 を押分けて、嵯峨の停車場へ出たのが、午近くであつた。
 そして、待合室に腰を据ゑる間もなく、發車時間に迫つたの
 で、取敢ず二條驛までの切符を購うて、京都行の列車に乗込ん
 だが、私達の陣取つた二等室には、大きなトランクを座席の横
 に置いた會社員らしい洋服の男が二人しか乗つてゐなかつた。
 『往きと違つて、馬鹿に空いてるぢやないか。』

と、三作は、敷島に火をつけながら、奇異さうに囁語いた。
 『ウム、——だが、また午後になりや、この花見歸りの客が出來
 るから、やはり昨日と同じさ。』
 と、應えながら私は、構内で買つた新聞を繰擴げてゐた。
 が、如何したとか、乗客の騒がしい下駄の音が途絶えて、プ
 ラットフォームが静かになつても、まだ發車するらしい様子が
 見えないので、何となくモドかしく思つた私は、何か不意に故
 障でも出來たのではあるまいかと窓を開けて、眩しく照りつけ
 た窓下の線路から、向ひ側のプラットフォームを眺めると、多
 勢の乗客が佇立んでゐた。
 で、直ぐ私は、往違ひに入つて來る列車を待つてゐるからだ

と考へたが、尙も窓から顔をのぞかせて、そよくと流れこむ柔かな窓外の風に熱つた頬を撫でさせてゐると、其所へ機關車の重つたるい音を大地に響かせて、花見客を満載した下り列車が入つて來た。

其の刹那、私の背後になつてゐる窓近くから、

『早く！ 早く早く。』と、言ふ、消魂しい驛夫の喚き聲がして

私達の陣取つてゐる二等室の扉の開く音がした。

と、同時に、憐しい下駄の音が聽えて、ドカ／＼と三四人の

乗客が飛込んだ騒々しい響きが傳はると、早や、

『あゝ、しんどかつた。』と言ふ嬌かしい女の聲が背後に聽えて

賑やかな笑聲も湧いた。

が、私は、やはり窓に兩腕をついて、下り列車で運ばれた乗客の降りる姿や、忙しげに入れかはず乗込む乗客の向ふの窓近くに現はれる顔を眺めてゐると、早や私の瀛車は動き出したすると三作は、私の袖を引きながら、

『オイ、癪な奴が乗りやがつたぞ』と、耳近く囁語いた。

私は、何が癪な奴かと可怪く思ひながら、窓から離れて振願

つた。

前の座席に並んで腰を据え、面白さうに打興しながら、左右に侍らせた三人ばかり、極めて下卑な、京都で言へば宮川町か、七條新地あたりの藝妓らしい白粉の女や、小茶屋の女將らしい、眉を剃つた一癖ある中年増を荐りに笑はせてゐる 光つ

た裁りたての衣服を纏うた、一見直ちに成金か、それとも拐帯して来た奴かと思はれる、虚飾に金縁眼鏡をかけた若い男の顔を眺めると、忘れるこの出来ない、昨夜さんさ底抜け騒ぎをして私達を睡らせずに苦しめた、例の隣室の一行だったから、私は、思はず眉を蹙めながら、呆れたやうに三作の顔を見た。

「如何だ分つたのかい？」

三作は、薄氣味の悪い微笑をした。

「ウム……。」

首肯いた私は、袂から敷島を抜き出して、吹いつけながら、側に棄て、置いた新聞を拾ひ上げた。

が、四圍かまはず、側に引付けた藝妓らしい女を擦つて、き

やツきやと肝高く笑はしたり、見るに忍びんやうな悪巫山戯をし始めた例の若い男が眼にチラついて、如何しても讀む氣になれないから舌打ちをしながら、また私は、窓外へ眼を反した、遠く洛西の連山は紫色に煙つて、真晝の白い眩しい日光を一面に浴びた沿道の畠には、青い麥や、黄ろく咲いた菜種の花や地に這うた豆の葉が、甦つたやうな色を見せて、私の眼界に擴がりながら、遠近に零れたやうに建つてゐる百姓家の低い棟や温んだ小川の流れや、生々した新芽の色を匂はせて、所々の畔に佇立んでゐる柳、檜、櫟などの立木と共に、残されて行く瀟車の黒い煤煙を受けて、後へくと間斷なく走つてゐる。――

けれど、昨夜の腹立たしい感情が、また新しく波立つて来て

一体奴らは何所まで執拗く附け纏つて来やがるのか、と、さながら私の楽しい生を呪ふ悪魔の群に追詰められたやう、忌々しく思つてゐる私の眼には、それらの忙しい變つて行く窓外の景色が、はつきり映らなかつた。

聽て、汽車が花園驛近く來ると、悪巫山戯をする騒ぎは歇んだ。——私は、また新聞に眼を落した。

と、間もなく、——

『旦那はん、一拳いきまへう。』

と、噪いだ調子で、端の方に座を占めてゐた山出しの下女を、俣ばすやうなのが、列車の動搖を受けて、ヒヨロつきながら、
『姐さん、御免やすや。』と、若い男の側にゐた細面に斷つて、

挽臼のやうな大きな臂を割入れた。

『ウム好しや、いかう！』

男は、力んだやうに殊更腕捲りをして見せた。

『ホ、ホ、ホ、——昨夜みたいに、負けんとおきやすや。』

『誰が負けるもんか。さあお出で！』

騒がしい藤八拳は始まつた。……

私は、いよく馬鹿にされてゐるやうに思つて、新聞を手にしながら、騒ぎ出した向ひ側を瞞めてゐると、トランクに脇をつき合つて、片隅に座をかまへてゐる會社員らしい二人の洋服も、驚かされたやうに期せずして睜つた。

すると、今まで苦い顔してゐた三作は、何か急に考へ出した

やうに振顧りながら、私に妙な眼の色を見せたか、と思ふ間に座を起つて、ツカ／＼と騒いでゐる前へ歩み出した。

「おや、これや可怪い！　と思はず眼を睜る刹那、拳を打つてゐる例の男の肩を軽く叩いて、

『オイお前は、私家にゐた龜吉ぢやないか。』と、三作は、不意に聲をかけた。

男は、振顧つた。

『ウム違ひない龜吉だ、龜吉だ！　——しかし、一体如何したんだ？　え、馬鹿に立派な服装をしてるぢやないか。』と、驚いたやうに、男の被てゐる綺お召の羽織の袖を手に取つてひねくりながら、

『この藝妓もお前が伴れてゐるのかい？　え、一体如何して、そんなに儲けたんだ？』と　半ば感心したらしく口早に三作が言つてゐると、傍に並んでゐた藝妓らしいのは、不意を喰つて尠からず驚かされたやう眼を圓くして、お互に顔を見合せた。

『え、私家の親父の金子を拐帯してから、お前は一体全体如何して金を儲けたんだ？』と、つゞけさまに忙しく奇異さうに言ひながら、男の横へ腰を入れやうとすると、拳の相手をしてゐた不格好なのは、いよ／＼驚いたやうに直ぐ座を譲つた。

例の男は、膽を潰したやう、頬をふくらして黙つたまゝ、自分の横に腰を据ゑて澄しこんでゐる三作の顔を呆れたやうに瞞めてゐる。

其の瞬間。私は、また例のいたづらを始めやがつたと思つたが、しかし、相手が相手だから、却つて其の奇抜な、——見縊り切つて、飽くまで茶にした三作の言草や態度が、何と言ふともなく暴虐の敵を膺懲してゐるやう、痛快に感じられて、思はず吹き出せた。

が、手にした新聞を讀んでゐるやうに装うて、努めて何喰はぬ顔しながら眺めてゐると、會社員らしい洋服の男も、耳を敬て、隅の方から興味ありげに睨つてゐる。——

すると三作は、いよく調子づいたやうに、
『オイ、え龜吉？——何故お前は返事をしないんだ？』と、また男の羽織に手をかけた。

『君あ、人違ひしてるんでせう。』

『何、人違ひ？——そんな馬鹿などがあるものか。』

『だつて、僕あ、龜吉と言ふ名ぢやないです。』

男は、些しく怒つたやうな面容をして、捉へられた袖をふり拂つた。

『何、龜吉ぢやない？——隠したつて、駄目々々、私あよくお前の顔を覚えてゐるから。』

『——』

〔175〕
『またさうぢやないか。お前がまだ、毎晩のやうに寢小便を垂れてゐる時分から、七年と言ふ長い間、使つてゐた人間を如何して見違えるものか、まあ、よく考へて見るが可い。——え、お

前は、拐帯したと言ふとがあるから、さうして隠すんだらうが何も私は、今、お前を捉えて、それを右や左言ふんぢやないしまたお前の親は、永年私の家で神妙に勤めてゐて呉れたんだから……。」

「失ッ、失敬な！」

男は、真赧な顔をして睨めつけた。

「龜吉だから龜吉だと、主人の私が呼んだのが、何がそんなに失敬だ？」

「ちや君あ、人違ひだと言つてゐる僕に對して、何所までも其の龜吉とか言ふ男だと言ひ張るんですか。」

「言ひ張るも糞あるものか。——え、そんな横着なと言ひなさ

んな。私あ、お前の顔を見てゐるから、これまで言ふんだよ。」

三作は、また袖を捉えた。

「困つた人だねえ。——ちや、何か證據でもあるんですか。」

「證據？ 何、横着な！——證據の無いと言ふものか。」

「好し！ ちやそれを聽かう。さあ言ひ給へ！」

男の血相は變つた。

が、三作は、期してゐたやうに男が怒り出せば怒り出すほど冷やかにおさまりかへつた面容をして、

「ハ、ハ、ハ、第一さう言ふお前の顔なり聲が證據ぢやないか」と、笑ひながら、秘ツと私に對つて、意味ありげな眼の色を見せる。

私は、よくも澄しこんで、彼麼に馬鹿にしたやうな、口から
 出任せが言へたものだ、と半ば驚きながら、これや今に喧嘩を
 しやがるわい、と思つたが、其のいたづらがいたづらだから、
 も癢し給へ、と今更制するとも出来ないまゝ、いくらか胸の底
 で氣を揉んでゐた。

「え、其のお前の短い額なり、眼の下にある其の小さな痣なり
 第一さう言ふ聲までが、五年前に拐帶した時代と寸分違はぬぢ
 やないか。——え、お前も、斯うして愉快をしてゐる時、こんな
 とを言はれて見れば、さう腹を立てたやうな眞似でもしなけれ
 ば体裁が悪からうから、そんな怒つたやうな顔をするんだらう
 が、しかし、よく考へて見なさい。」

「—。」

「お前が可愛いと思へばこそ、私の親父も、お前が寝小便を垂
 れたり、また人並外れた悪戯をした子供の時分から、あれだけ
 の世話もし面倒も見えてゐたんだ、それに拐帶されても、親父は
 訴へやしなかつたんだから、何も、さう隠すとはないさ。——え
 絶吉！」

男は、呆れかへつたやうに黙つて、顔を反けて了つた。

「オイ、何も彼方を向く理由が無いぢやないか？——え、絶吉！」
 三作は、勝誇つたやうに、また袖を引く。

すると男は、急に何か考へたやうに單り首肯しながら、覺め
 てゐた眉の間に一種の淋しい微笑を洩して、

「イヤ分りました。」と、妙に調子を變へて振願つた。

「何、分かつた？——如何分かつたんだ？」

「如何つて、何、君のさう言はれる意志が分かつたんです。」

男は、薄氣味の悪い笑ひを見せた。

「何？ 僕の……。」

急に三作は、妙な顔色をした。

「ハ、ハ、ハ、ハ、も可いちやありませんか。」

「。』。

「それよりも、一つ和睦しちや如何です？ ハ、ハ、ハ、ハ。」

三作は、眼をパチ／＼させた。

と、同時に、瀛車の速力は緩くなつて、二條の停車場へ入つ

た。男の看破したと言つたやうな底氣味の悪い笑ひ顔を見た。私は、瀛車の停まるのを待ちかねて、轉げ落るやう、後も見すコソ／＼と改札口へ突走つた。

が、驛員に遮られて、偶と考へると、乗る時切符を三作に預けて置いたので、これや失損つたわい、と赧い顔しながら、仕方無く、ぞろ／＼と乗客の流れ出る改札口に佇立んで待つてゐると、間もなく三作は、藝妓らしい例の女達に取巻かれた男と前と違つた調子で何か面白さうに話合ひながら、ゆるやかに歩を運ばして來るのが、人混みの間から望まれた。

おや、眞個に和睦をしやがつた、と思つた私は、餘りのとで呆れながら、素知らぬ顔を装うてゐた。

「オイ、この龜吉君が、和睦のしるしに、これから晝飯を喰ひに行かうッてんだが、如何だい？——え面白いぢやないか。」

「——。」

「え、行かうぢやないか。」

私は、黙つて俯向いてゐた。

すると、女將らしい女の耳の傍で秘々と囁語いてゐた男は、

ツカ〜と近寄つて来て、

「まあ可いちやありませんか。——これも何かの御縁でせうから是非……ねえ。」と、前と違つた愛嬌のある顔を見せた。

九 たはいもない和睦

到頭私は、三作と其の例の男とに無理強いされて、譯けもななく構内車夫の俥に乗せられた。

「ぢや、お先さへ……。」

斯う軽く會釋をして見せた例の男を先登に、私達や、藝妓らしい女を乗せた七臺の俥は、長く一列についで、ベルを掻き鳴らしながら、真晝の白く乾いた街路の、市内電車の劔の刃のやうに光つた線路に沿うて驅け出した。

私は、テレ臭いと言ふよりも、あれだけ三作から体よく侮辱

された男が、怒り出しもせず、却つて案外にも笑ひ出したのみか、斯うして兎にも角にも、——最初から悪意を以て望んでゐた私達に對して、何故好意的に晝飯を喰ひに行かうと誘ひ出したのであらうか、と考へた。……其の刹那、私の瞳孔に男の冷笑しながらヒストルを振翳してゐる、もの凄いや顔がまざ／＼と映じて、私と三作は、底知れぬ陥穽に墜入つて藻掻き苦しんでゐる心地がした。——

で、何となく轆棒の下される先きが、耐えられぬほど薄氣味悪く不安に感じられたから、直ぐ車夫に命じて、この列より離れて逃げ出さうかと考へたが、しかし、憎らしいほど澄しこんだ顔をして、車上ゆたかに煙草を燻らしてゐた三作の姿を振顧

つて眺めると、一種の淡い負惜みが胸に湧いて、今更私一人逃げ出すのも餘りに卑怯過ぎてゐると思はれて、何故そんなことから最初に強く拒まなかつたのだ、と自分で自分を嘲けつた。が、茶の中折帽の色を見せ、私の前の俤に何氣ない鍋子で乗つてゐる男の後姿を、翻つて眺めると、また妙に氣が静まつて、其の男の顔が、三作と同じやうな、謂はゞ剽輕な笑ひのみに生きてゐる男のやうにも見え出した。——と、思ふと、この長く一列にツイいて走つて行く俤から、其の轆棒を下された家の座敷から、悉く私の求めてゐた、所謂無邪氣な滑稽な辛い浮世の苦勞を忘れたお茶番旅行の氣分に充されてゐるやうに思はれて、我ながら奇異なほど、沈んだ心が軽く浮き立つた。

左手の方に望まれた二條の離宮の蒼味だつた外塚も、儼然と高く築きあげた石垣の上の萌えた青芝の色も、うねつた老松のふしぎな枝ぶりも、いつか私の背後に消えて、濁つた堀川を越えると、直ぐ紅殻のくすんだ色で染めた軒並の低い静かな京都の街路へ入つた。

そして、私達の長く一列につゞいた俥は、いもた家の多い押小路通りを一直線に東へくと走つた。

廳て駄屋町まで來ると、男を乗せた先登の俥は、南へ反れて一面に高く竹の扉を圍らした大きな料亭の門口へ轆棒の音させた。つゞいて私達の俥も停まつた。

七人の酒の座は湧くがやうに賑やかであつた。それに藝妓が下卑てゐるだけ、遠慮もなく、直ぐ噪ぎ出して、さながら十年の舊知のやうな、馴々しい顔を私達に見せる。

『さう何も遠慮は要らんぢやありませんか。——折角御賛成を願つて、此家まで斯うして御足勞を煩したんですから。さあ、何卒……。』

と、無理無体に侷める例の男に袖を引張られながら、背後から、

『まあ、可いやおまへんか。さあ、お出でやすな。——何ぞすの